

# 東大紛争大詰めの 文学部処分問題と 白紙還元説

The Problem of Disciplinary Punishment at the Department of Literature in  
the Final Stages of the University of Tokyo Struggle and the Assumed  
Proposal of Blank Slate

清水靖久

SHIMIZU Yasuhisa

- ①文学部処分と東大紛争
- ②加藤代行の最後の申入れ
- ③東大紛争の収拾と文学部紛争
- ④文学部処分問題のその後
- ⑤文学部処分の白紙還元説

## 【論文要旨】

東大紛争大詰めの1968年12月23日、加藤一郎総長代行が全学共闘会議に最後の話し合いを申入れ、懸案の文学部処分の「白紙還元」を提案したのに、全共闘は話し合いを拒否したという説がある。事実ではないが、その当否を検討するためにも、文学部の学生がなぜ処分されたのか、その「白紙撤回」を全共闘はなぜ要求しつづけたのか、1969年1月18、19日の機動隊導入による安田講堂の攻防は避けられなかったか、1969年12月まで文学部だけ紛争が長引いたのはなぜかを考察する。

東大紛争における文学部処分とは、1967年10月4日の文学部協議会の閉会后、文学部学生仲野雅<sup>ただし</sup>が築島裕助教授と揉みあいになり、ネクタイをつかんで暴言を吐いたとして無期停学処分を受けたことである。当時の山本達郎文学部長は、12月19日の評議会で、仲野の行為を複数教官に対する「学生にあるまじき暴言」として誇大に説明して処分を決定し、一か月後に事実を修正したが伏せた。1968年11月就任の林健太郎文学部長は、同月上旬の軟禁時以外は、仲野と築島の行為の事実を議論せず、教師への「非礼な行為」という説明を維持した。1969年8月就任の堀米庸三文学部長は、9月5日、仲野処分を消去するとしたが、処分は適法だったと主張しつづけ、築島の先手の暴力という事実を指摘されても軽視した。

この文学部処分は、不在学生が処分された点で事実誤認が明らかになった医学部処分とともに東大紛争の二大争点であり、後者が1968年11月に取消されたのちは、最大の争点だった。加藤執行部は、12月23日、文学部処分について「処分制度の変更の上に立って再検討する用意がある」と共闘会議に申入れたが、林文学部長らが承認する見込みはなかったし、共闘会議から拒否された。「白紙還元」の提案と言えるものではなかった。

【キーワード】 東大紛争、文学部（学生）処分、白紙撤回、白紙還元、行為の事実

東大紛争大詰め、1968年12月23日、加藤一郎総長代行が全学共闘会議に最後の話し合いを申し入れ、懸案の文学部処分「白紙還元」を提案したのに、全共闘は話し合いを拒否したという説がある。事実ではないが、四半世紀のちに「白紙還元」が語られてから注目され、全共闘の未熟さや頑なさを表すものになりつつある。その当否を検討しようとするれば、文学部の学生がなぜ処分されたのか、その「白紙撤回」を全共闘はなぜ要求しつづけたのか、「白紙撤回」と「白紙還元」との違いは何かを論じなければならないだろう。1969年1月18、19日の機動隊導入による安田講堂の攻防は避けられなかったか、1969年12月まで文学部だけ紛争が長引いたのはなぜかという紛争の経過の考察とも関連するだろう。

東大紛争における文学部処分は、事実誤認が紛争中明白になった医学部処分と比べると、黒白つけにくい微妙な問題だった。全共闘の七項目要求に「文学部不当処分白紙撤回」が入ったのも、党派の活動家がつけ足したと感じる者が少なかった。処分は正当だったと文学部当局が主張しつづけたので、処分の対象とされた行為の事実を問うことが容易でなかった。文学部処分が十分に論じられなかったこと、とくに処分の対象とされた行為の事実がほとんど論じられなかったことが、東大紛争の構造的な特徴だった。しかし、事実は何かと調べれば調べるほど、文学部処分は、白紙還元説の当否に尽きない問題であり、東大紛争の帰趨を左右した大きな問題だったとわかる。この問題で人生の歩みを変えた人も数知れない。

この問題を新たに検討する材料はいくつかある。第一に、当時発表されたさまざまな文書として、大学の広報資料、学生のビラ類、新聞雑誌で報じられた声明や会見や観測記事、紛争直後に刊行された図書などがある。そのうちビラ類は、「東大闘争資料集」(1992年8、9月、国会図書館など所蔵)の原物が山本義隆から歴史民俗博物館に寄贈された。第二に、近年公開された当局資料として、総長代行特別補佐だった福武直、植村泰忠、坂本義和、鈴木成文の4人が1969年4月前後に会議した「補佐の記録」、1970年6月ころ加藤一郎と総長代行代理だった大内力が4元補佐と討議した回想会議の記録があり、東京大学文書館に所蔵されている。同文書館所蔵の評議会記録では処分決定後に事実が修正されていた。東京大学情報公開室開示の法学部「教授会議事録」もある(文学部「教授会議事要録」「教授会資料」もあることに本稿査読後気がついた。かつて何度か法人文書検索はしたのだが)。第三に、1970年から本格的に審理された東大闘争裁判の記録がある。第四に、関係者からもっと聞取りしたかったが、多くはすでに亡くなっている。当時の学生が語らないのは実に困る。第五に、研究の蓄積がすでにかなりある<sup>(1)</sup>。

東大紛争の経過のなかで、行為の事実そのものが十分に論じられなかったこの問題を検討するには、細かい事実を沢山論じなければならない。筆者も読者も迷路に入りかねないので、まず略年表を掲げて、文学部処分を中心に東大紛争を概観したい。「東大闘争は、実際には各学部・大学院のストライキ実行委員会や闘争委員会の集まりとして闘われたのであり、私たちはその総体的な運動体をはじめのうちは「共闘会議」と言っていました。それは文字通り共闘組織だったのです。…東大闘争の「共闘会議」は、その呼称をいつのまにか「全共闘」に変えましたが、この言葉は、じつは日大から輸入したものです」と山本義隆(『私の1960年代』1510、156頁)<sup>(2)</sup>が回想したように、「全共闘」という呼称が現れるのは1968年11月のようだが、12月の大詰めでもまだ「共闘会議」「共闘」と呼ばれることが多かった。ここでは当時の呼称を主に用いることにする。

---

## 1967年

10/4 文学部協議会閉会后、築島裕と仲野雅が揉みあう。

12/19 評議会、仲野の停学処分を決定。

## 1968年

2/19f 医学部で春見医局長の暴行に対して学生が謝罪要求。

3/11 評議会、医学部学生・研修医 17 人の処分を決定。

6/15 学生、安田講堂を占拠。

6/17 機動隊導入。

6/26 文学部学生、無期限ストライキ。

7/5 全学共闘会議結成。

7/15 七項目要求決定。

8/10 大河内一男総長告示、再審査委員会と大学問題検討委員会を設置。

9/4 五味智英文学部長、仲野の処分を解除。

10/28 弘報委員会「資料」に「文学部の学生処分について」掲載。

11/1 大河内総長、突如退陣。医学部処分取消。

11/4 加藤一郎、総長代行に選出。

11/4-12 林健太郎、文学部長就任、学生に軟禁される。

11/12 図書館前で共闘と民青が衝突。

11/16ff 加藤代行、共闘・民青と予備折衝、公開予備折衝。

11/20 文学部教授会、40 人署名の加藤代行宛て要望書。

11/22 東大日大闘争勝利全国学生総決起集会。

12/1 文学部教授会「仲野雅君の処分問題について」配布予定中止。

12/2 加藤代行「学生諸君への提案」。

12/13 工農経法育理養の民青と無党派からなる七学部代表団成立。

12/16, 18 共闘、代表団学生と加藤代行的予備折衝を粉砕。

12/23 共闘、法学部研究室を封鎖。加藤代行、共闘に最後の申入れ。

12/26 加藤代行「「提案」をめぐる基本的見解」。

12/29 加藤代行、坂田文相と会談、入試の一応中止を決定。

## 1969年

1/9 共闘と民青の乱闘、機動隊の再度導入。

1/10 七学部代表団集会。加藤代行と代表団学生との確認書。

1/18, 19 機動隊導入による安田講堂の封鎖解除。

1/20 入試中止最終決定。文学部以外の学部で徐々に授業再開。

2/4 文学部学友会委員長ら 6 名逮捕。

2/6 林文学部長「いわゆる文学部処分について」(2/20 発表カ)。

2/11 加藤代行、七学部代表団と最終確認書。

3/9 加藤代行「「七学部代表団との確認書」の解説」配布 (3/27 発行)。

3/31 加藤代行者辞任。

4/1 加藤一郎、総長就任。岩崎武雄、文学部長就任。

4/12, 19, 26 (+ 3/2, 6/7) 元総長代行特別補佐 4 人会議「補佐の記録」。

7/14 文学部補講授業再開、20 数人の教官が拒否。

8/6 堀米庸三、文学部長就任。

9/5 堀米文学部長、仲野の処分を消去。

9/6 国文科追及集会で築島と仲野が初めて同席して対質。

---

9/26 堀米文学部長書簡。  
10/9 文学部に機動隊導入，封鎖解除。  
10/13 文学部授業再開，学生の抗議続く。  
10/17 折原浩「東大文学部問題の真相」。  
12/15 文学部新学期，ストライキ解除。

#### 1970年

6/7ころ 加藤一郎，大内力と元補佐4人の回想会議。  
暮カ 長谷川宏「文学部闘争——敗北の総括」「学問批判」。

#### 1971年

3/17-10/6 加藤一郎，東大闘争裁判で証人喚問。  
11月 林健太郎「東大紛争雑感」。

#### 1973年

4/1 林健太郎，東大総長就任。  
4/6 東京地裁で安田講堂Bグループ判決。  
11月 折原浩『東京大学——近代知性の病像』。  
1977年2/18 東京高裁で被告人最終意見陳述。6/30 判決。  
1991年8月 加藤一郎ほか『「大学紛争」を語る』。  
1993年8月 鈴木貞美「四半世紀ののちに…」。  
1995年9/2 「東大全共闘26年後の証言」放送。  
2009年7月 小熊英二『1968』上下。  
2014年1/30「東大紛争秘録」放送。  
2017年10/11-12/10 国立歴史民俗博物館で企画展示「「1968年」——無数の問いの噴出の時代——」。

## ①……………文学部処分と東大紛争

東大紛争における文学部処分とは、1967年10月4日の文学部協議会の閉会后、文学部学生<sup>ただし</sup>仲野雅が<sup>ひろし</sup>築島裕助教授と揉みあいになり、ネクタイをつかんで暴言を吐いたとして停学処分を受けたことを指す。12月19日の評議会（東大の全10学部の学部長・両評議員と14研究所長の合計44名が出席する会議）で処分が決定された。12月22日、停学処分（無期）が発表されたが、それに付された文学部長告示には、処分の理由として、「当人が本学部教官の一人にたいしてネクタイをつかみ暴言を吐くという非礼をおかしたことにある。このような言動が状況の如何を問わず許されないことは言をまたない」とあったという（1968年12月1日配布予定だったが配布が中止された文学部教授会名の文書「仲野雅君の処分問題について」から引用。1969年2月5日の人文系斗争委員会糾弾資料による）。

この処分の対象とされた行為については、さまざまなことが問われる余地があった。仲野は築島の退席を<sup>ひない</sup>扉内で阻止したのか、それとも退室した築島と扉外で揉みあったのか、後者であれば築島が先に手をかけたのではないのか。そのような事実の問題と密接不可分だが、権利の問題として、文学部教授会は仲野の行為を処分する権利があるか、仲野の行為が処分されるのは暴力だからか、教師に対する非礼だからか（あと、学生運動弾圧の政治的動機からではないか）、築島の暴力が先だったかどうか、評議会の処分は適法か、正当か。ちなみに処分の根拠は、懲戒に関する学部通則



二五条「1. 学生が本学の規則に違反し、又は学生としての本分に反する行為があったときは、学部長は、総長の命により、これを懲戒する。2. 前項の懲戒については、評議会の議を経なければならない。3. 懲戒は、退学、停学又は譴責の処分とする。」(加藤一郎『「七学部代表団との確認書」の解説』6903)

この懲戒の規定では、「学生としての本分に反する行為」とは何かが議論的になるが、「評議会の議」にも不可解な点がある。1967年12月19日の「評議会記事要旨」が修正されているからである。山本達郎文学部長の説明として、去る10月4日の文学部協議会の流会後、「仲野雅は退席しようとする築島助教授のネクタイを引っ張るなどの乱暴を働き、それを阻止しようとした他の教官に対しても、学生にあるまじき暴言をはいて騒ぎ立てた」とタイプ印刷された発言が、「仲野雅は退席しようとする築島助教授のネクタイをつかみ、学生にあるまじき暴言をはいて騒ぎ立てた」と手書きのインクで修正されている(写真1)。もう一か所、山本の発言の三行分も抹消されている。これらについては、68年2月20日評議会で配布された1月23日の「評議会記事要旨」には「総務部長、前回記事要旨を朗読、別紙のとおり修正のうえ承認された」と記されており、こっそり修正されたのではなく、1月23日の評議会で修正発言があって承認されたことがわかる。

そのようにして1967年12月19日の評議会で仲野の処分が決定された。山本文学部長の発言が次回評議会で修正されたのは、発言の記録が不正確だったからというよりは、発言そのものが不正

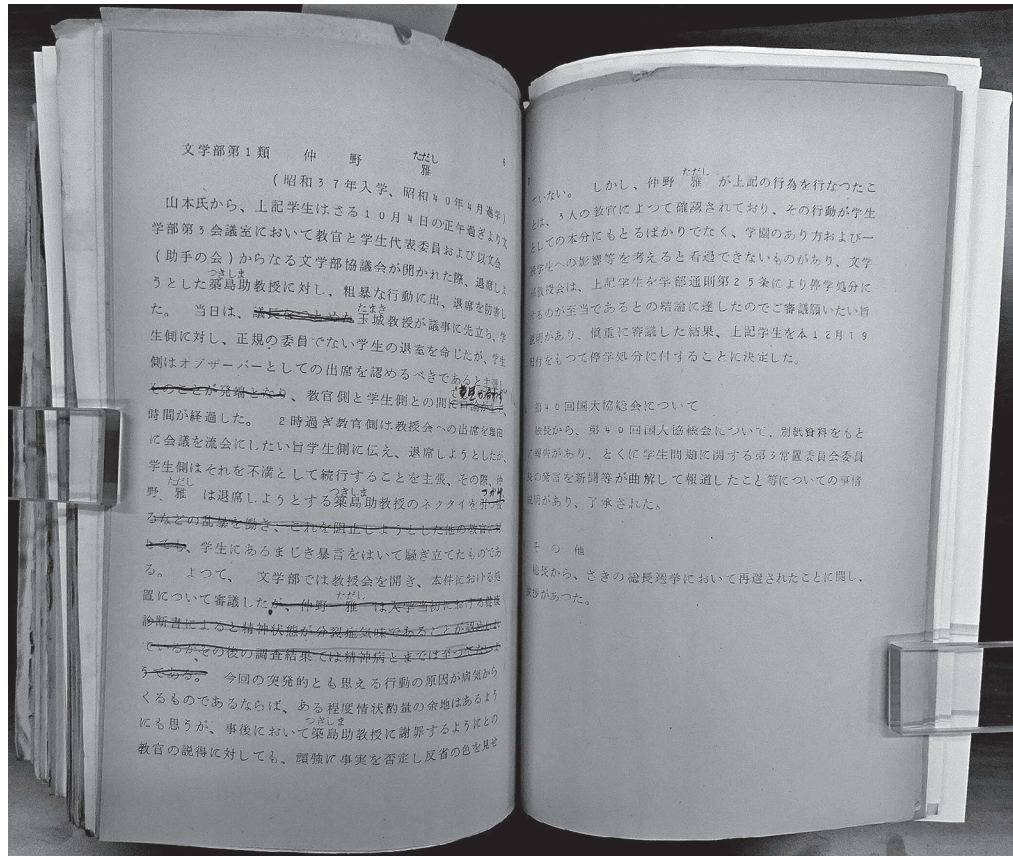


写真1 評議会記事要旨 1967年12月19日のこと、1968年1月23日評議会、東京大学文書館所蔵

確だったからだろう（発言者が言ったことを記録者がそのまま書いたことは、抹消された三行分からも窺われる）。処分された仲野の行為は、12月19日には築島助教授への乱暴と複数教官への暴言だったが、1月23日には築島助教授への暴言に限定された。これは、仲野が暴れまわった印象を与える誇大説明で処分を決定し、一か月後に処分対象の行為の事実を変更したものであり、裁判でいえば、判決の確定後に起訴事実を変更するようなことだろう。1月23日の評議会で、疑問や異議が出なかったのだろうか。ともかく文学部処分は、事実が誇張されて決定された。そのことは紛争中はもちろん、ずっと知られていなかった。

12月19日の「評議会記事要旨」の他の部分では、山本学部長は、仲野が築島に対して「粗暴な行動に出、退席を妨害した」ことを説明している。仲野は「事後において築島助教授に謝罪するようにとの教官の説得に対しても、頑強に事実を否定し反省の色を見せていない」という。それがなぜかは解釈され説明されることはなかった。いずれにしても「学生にあるまじき暴言」をはいたこと、「その行動が学生としての本分にもとるばかりでなく、学園のあり方および一般学生への影響等を考えると看過できない」ことから、文学部教授会は停学処分の結論に達したという。評議会では「慎重に審議した結果」、停学処分を決定したというが、どのような審議をしたかはわからない。

さて、文学部処分は、医学部処分とともに、東大紛争の二大争点となった。医学部処分では、1968年2月19日に上田病院長を取囲んだ医学部学生が春見医局長から暴行されたので謝罪を要求して翌朝に至った事件について、3月11日の評議会で学生12人（研修医を含めて17人）が処分されたが、そのなかに当日不在だった学生粒良邦彦が含まれていたため、事実誤認による処分として、その政治的意図を含めて、強い抗議が生じた。3月28日に卒業式闘争、4月12日に入学式闘争があり、6月15日に医学部全学闘争学生が安田講堂を占拠し、17日に大河内一男総長が機動隊を導入し、それに対する学生の憤激が広がるなかで、20日に全学総決起集会、28日に安田講堂で総長会見、7月2日に安田講堂再占拠、5日に全学共闘会議結成、15日に七項目要求の決定に至った。

文学部では、6月26日から学生が無期限ストライキに入り、やがて全学共闘会議に結集した。七項目要求のうち、医学部処分関係が第三までを占め、「文学部不当処分白紙撤回」が第四に入った。8月10日の大河内総長の告示で再審査委員会（三ヶ月章委員長）と大学問題検討委員会（山本達郎委員長）が設置されたが、文学部処分は再審査の対象とはされなかった。9月4日、仲野の処分は解除された。仲野は教室に復帰できるようになったが、処分された履歴は消えなかった。10月12日、法学部学生は、文学部処分白紙撤回を除く六項目を要求してストライキを決議し、全10学部がスト<sup>(3)</sup>に入った。11月1日に大河内総長が突如退陣し、医学部処分は再審査委員会の結論によって取消されたが、文学部処分は変らなかった。

大河内総長退陣直前の10月28日、東京大学弘報委員会「資料」第3号に「文学部の学生処分について」が掲載された。問題の行為は「教授会側委員がすでに開催中の教授会へ出席するため退席しようとしたところ、一学生が退席する一教官のネクタイをつかみ、罵詈雑言をあびせるという非礼な行為を行なった」とされた。処分は正当とも適法とも主張しなかったが、「本処分については、学生側に種々な批判や非難が存しており、いわゆる「七項目」の一つにも含まれているが、非難の多くは根拠のないものか、又は誤解にもとづいている」として、六点の非難に反論した。学生が扉内で教官の退席を阻止した「非礼な行為」というのが、それからずっと（翌年9月まで）、文学部

の公式説明でありつづけた。

加藤一郎が総長代行（総長事務取扱）に選ばれたのが11月4日、紛争解決のための権限集中、特別補佐の選任、機密保持の三条件を示して就任した。同じ4日、林健太郎文学部長が文学部学生に軟禁されて団交（団体交渉）に入り、8日には教官50数人が署名した抗議声明（田中・福田・星野3教授が作成したと弘報委員会「資料」第4号）や教官350人の抗議集会があったが、12日未明まで軟禁が続いた。団交の最大の争点は文学部処分であり、築島と仲野の行為の事実認識とその評価だった。学生が「文学部協議会での教官退場の際、築島教官をはじめとする教官側の強引な行為があったわけだが、あなたはそれを暴力行為とはみなさない。そして、みなさない理由として、その行為の原因や背景を問題にしている。しかし一方で、教官側のそのような強引な行為に抗議し、阻止せんとした仲野君の行為については、その行為そのものを即自的に問題にし、彼の行為の原因なり背景なりを問題にしていない、これはどういうことか」と林に問うたように、築島が強引な行為をしたことは共通認識だった。

林は、暴力行為を認定し処分する権利は教官にあると主張した。「ある事柄の事実認定や価値判断に関して学生側と意見が対立する場合どうするかという問題だな。その場合教官側は学生の言い分もいろいろ考えるけれども、しかし教官側がそういうことを聞いた上で、やはり正しいと思った考えで決めるわけです。…処分の権利は教官側にあるんですよ。」「教授としては、会（文協）は終わったことであるし、教授会に行かなければならない。ところが、ドアの所に仲野君がいたから体と体がぶつかったことは当然です。そのことを築島教官が仲野君に暴力を働いたという人がいます。しかし、これについても、言われているような暴力行為ではない。これは外へ出るために止むをえず体に触ったことである。これに対し、仲野君が教官にやったことは明らかに暴力行為である。（ヤジ、騒然）しかも、これは処分に値する。そう認定したわけです。（騒然）その認定はそれから同時にその後の処分の手続きにも何もまちがった所はない。従ってこの処分は正当であり、我々は白紙撤回する必要はありません。」（「文学部団交8日間の記録」、東大闘争全学共闘会議『砦の上にわれらの世界を』6904、292f頁）

文学部の長老教授たちは、林文学部長軟禁中の11月6日、法華クラブで密議し、仲野の行為は扉内の退席阻止ではなく、扉外の罵詈雑言だったと認識を改めたい（折原浩『東京大学』7311、237頁）。「「オブザーバー」学生は、この退席を阻止しようとして入口の扉附近に集ったが、教授会側委員は、築島助教授、関野教授、玉城教授、登張教授の順で、学生たちをかきわけて扉外に出ようとした。このとき一学生が、すでに扉外に出ていた築島助教授のネクタイをつかみ、大声を発して罵詈雑言をあびせるという行為に出た」と文学部教授会名の文書「仲野雅君の処分問題について」に記した。この文書は、12月1日に配布される予定だったが、直前に配布が中止された、「その理由は不明である」という（69年2月19日の人文系斗争委員会の討論資料のなかの抄録の註。全文は2月5日の同委員会の糾弾資料に収められている）。扉外で仲野が罵詈雑言をあびせる前に、築島が行為しただろう事実は、論じられるべくして論じられなかった。

さて、加藤代行は、就任した11月4日に「学生諸君との討論を通じて紛争の解決をはかりたい」旨の掲示を出したように、紛争の収拾ではなく「紛争の解決」をめざし、全学集会の開催をはかっていた。11月12日には共闘会議が全学封鎖方針をとって図書館前で民青武装部隊に圧倒され、学



生同士の対立が露呈した。加藤代行は、16日共闘と、17日民青と非公式に予備折衝し、18日共闘と、19日民青と公開予備折衝するとともに、各学部長らから意見を集めて全学集会向けの提案を練っていた。

文学部教授会は、11月20日、60人中55人の出席者のうち40名の教官有志が署名した「要望書」を作成し、翌日加藤代行に届けた。「およそ大学において最も必要なことは暴力を絶対に認めないということです」、大学当局は「学生がいかに暴力的に反抗してきても、一步も後退せぬ毅然とした態度をとるべきであると存じます」、「当局としては、暴力是認の形をとってまで、紛争の解決をはかる必要はないと信じます」と訴えていた。文学部処分の問題には一切触れなかったし、処分対象の行為の事実を論じることもしなかった（『砦の上にわれらの世界を』303f頁。文学部執行部の林、堀米、岩崎のほか、山本信、築島が署名していないから、「要望書」の実質的な賛同者は45名だろう。文教授会60人とあるが、『東京大学百年史』資料三 8603, 133ff頁によれば、文学部の教授助教授は併任を含めると当時75人いた）。

11月22日の東大日大闘争勝利全国学生総決起集会の朝、読売新聞は東大首脳部の紛争解決策として、「文学部処分は白紙撤回を含めて再検討する」、8・10告示は実質的に廃止するなどの解決策の方向を固めたと報じた。加藤学長代行は21日の記者会見でも「文学部の処分は、当時の基準、手続きからは正当に行なわれたという考えに変わりはないが、処分制度そのものをさかのぼって考えるということは検討している」と語ったという。もっとも文学部教授会が連名で「これ以上の譲歩をしないように」との要望書を突きつけるなど、教官内部には反対の動きも強いと観察していた。しかし読売新聞は同日夕刊で、解決策はなお討議中で固まってないし、文学部処分は正当になされたものだから「白紙撤回することは全く考えていない」と加藤代行が言明したと訂正した。

加藤代行は、各学部長らの意見を整理し、29日の提案集会は流会となったが、12月2日に「学生諸君への提案」を文書で発表した。しかし文学部処分の問題では、林文学部長らの意向に制約されて、新しい考えを示せなかった。「4 文学部処分について (1) この処分は、当時の手続きや基準からみて正当になされたものであり、それを白紙撤回せよとの要求には応ずることができない。われわれは、従来の規則や慣行にとらわれずに幅広く検討するという基本的立場に立って、あらためて十分検討を加えてみたが、他の措置をとるだけの納得できる理由を見出すことはできなかった。(2) ただ学生諸君が、現在この事件を重視していることの中には、現行の処分制度に対する重要な批判が含まれていると思われるので、われわれとしても、この事件を、今後の処分制度検討のための参考として考えていくことにしたい。」

文学部教授会「仲野雅君の処分問題について」の12月1日配布予定が中止されたのは、処分対象行為の変更（扉内の退席阻止から扉外の罵詈雑言へ）が事実をめぐる論争を招く恐れも働いただろうが、加藤代行が「教育的処分」を反省しようとしていたそのとき、仲野処分は「教育的」だったと主張したことが主な理由ではないだろうか。前引の67年12月22日文学部長告示で仲野処分の理由として「当人が本学部教官の一人にたいしてネクタイをつかみ暴言を吐くという非礼をおかした」としたことについて、一年後のこの文書は「ここにいう非礼とは、教師と学生との間には、もたらすべき一定の礼節があるべきであり、それがやぶられたことをさしているが、それが儒教的旧道徳の再版を意味するものではなく、学問の研究と教育に対しきびしい責任を負っているものに



に対する教えられるものの自然にとるべき態度と解さるべきものである」と不可解に解していた。

12月 は、入試中止問題が浮上する一方で、学生間の対立が深まった。駒場では反帝学評と革マル派との内ゲバが6日から11日まで続いたし、13日教養学部代表団選出で工農経法育理養の七学部代表団が成立し、16日に民青と無党派からなる代表団学生2500人が加藤代行との予備折衝で集会したのを共闘会議学生1500人が粉碎、18日も同じだった。そして23日に加藤執行部の本部があった法学部研究室を共闘会議が封鎖し、その前に加藤らは農学部に移り、共闘会議に最後の申入れをした。そこで共闘会議に示した見解を26日に七学部代表団に述べ、その趣旨を文書にしたのが、「基本的見解」だという。

12月26日の「「提案」をめぐる基本的見解」で加藤は、「東京大学は文字通り存亡の危機に直面している」という認識から、かなり思い切ったことを訴えた。これまでは学生の処分など過去の措置については、「当時の判断基準に照らして適法性を備えていたか否か」を判断してきたが、これからは今日の時点に立って、将来の大学改革の方向を見出すために、「当時において適法性をもちえたことがらについても、今日それが起こったとすれば、別の措置をとることが十分考えられる」と踏み込み、医学部処分が「政治的処分」の意味をもったこと、また「教育的処分」は今日その基礎が失われてきているし、学生の自治活動への規制手段となる危険があることを認め、今後は「大学という研究・教育の場に必要の規律の違反のみを問責する」という方向を示したうえで、「いわゆる文学部処分は、当時の基準からみて適法になされたものであるが、このような処分観や処分制度が確立されたときには、新たな立場から検討を加える余地がありうるであろう。」

## ②……………加藤代行の最後の申入れ

ここからは、福武、植村、坂本、鈴木の4人の「補佐の記録」(文書名は「東大紛争回顧録」ⅠⅡⅢ)を用いて、加藤代行の最後の申入れについて述べる。この記録は、1969年3月2日、4月12日、19日、26日、6月7日、4人の元総長代行特別補佐が5回(福武のみ4月中旬2回欠席)会議した録音テープ11巻を鈴木がまとめたものらしい。その記録からは、加藤代行らが新制度での文学部処分の再検討に傾いたのに、林文学部長らが抵抗したことがよくわかる。林文学部長は、11月20日に健康回復の挨拶で堀米、岩崎両評議員とともに来て、加藤代行に「仲野処分は譲ってくれるな」と申入れたし、同日の文学部教授会で40名が署名した要望書が翌日加藤代行に届けられた。その教授会のことだろう、福武が11月に文学部で発言したところ、「暴力に対し毅然たれ」と大変な反発だったという。そのころ加藤執行部が各学部から集めた意見では、文学部からは「文学部処分については必ず文学部の意見を徴して決めてくれ」との硬い態度が記されていたという。

加藤は、仲野を「恩赦ないし復権」する心づもりであり、11月18日の安田講堂での全共闘との公開予備折衝でもそのつもりで話したという。12月2日の「学生諸君への提案」では仲野処分を「新しい処分制度の下で再検討する」と提案するつもりだったが、林に電話して断られ、「新しい処分制度の参考にする」と提案するにとどまった。結局文学部の意見が通り、補佐たちは「われわれ一同は大へん不満であった。とくに坂本は不満、これではどうなっても知りませんよ、と喰ってかかった」という。林は、12月17日の学部長会議で「新制度の処分でも仲野処分は処分に値する」と発言

したし、26日の加藤の「[提案]をめぐる基本的見解」に対しても、27日の学部長会議で「これ以上譲られると、学部長はしておれん」と言った。なお、12月19日に「御前会議」が都市センターで開かれているが不詳。南原、我妻、有沢、大内兵衛に説明せざるをえなかったと加藤が回想会議で触れている会合のことだろうか。

12月20日すぎには助手たちが危機打開のために動いた。それまで加藤執行部と共闘とのラインは二本あった(川田侃・戸塚秀夫-某助手、藤木英雄-三吉譲・塩川喜信)が、それが23日には切られて、新しい接触が生じた。福武直には、石田雄経由で助手共闘の人に代って社研助手の神林章夫が接触してきたので、22日朝会ったら、「七項目を形の上で呑めば、[安田]講堂を除いて封鎖は解ける」、セクトよりもノンセクト・ラディカルの方がきついが、「形式的に全部かちとれたということでノンセクトは引くだろう」、セクトの方はおりたいので、「何とか転換しよう」と考えている、だから加藤代行に七項目を呑むように言ってくれと神林は話した。福武は、「文処分の白紙撤回だと言いきれるだけの権限は加藤代行にはないだろう。又、それをやった場合に、うまく行くかもしれないが、加藤代行自身が一ぺん死ぬことになる」からやれぬだろうと答えたという。そのように共闘のなかでもノンセクトがラディカルなので、彼らが引くために、加藤代行が形式だけでも七項目を呑むという解決策が共闘側に都合よく探られていた。

なお、福武が論じた加藤代行の権限の問題について触れておきたい。加藤は、11月4日に学部長互選で総長事務取扱に選ばれたとき、「評議会が紛争解決について総長事務取扱に責任をまかす」「教授会は学部長評議員にその責任をまかす」ことを受諾の条件とした(11月5日法学部教授会議事録)し、11月10日の評議会で「今回の紛争解決について意見が分かれたとき、または急を要するときには、その決定の責任を総長事務取扱に任せること」を第一の条件として事務取扱を引き受けていた(評議会議事要旨)。「責任をまかす」は、総長代行以外の者が責任を自任して勝手に行動しないようにという意味だろうか。判断や決定をまかすとか、権限を委ねるとかは異なるし、責任は負うもの、取るものだから、かなり奇妙な表現だった。福武も「補佐の記録」コピー紙に、第一の条件「権限集中」(第二「特別補佐」、第三「機密保持」)について「紛争解決 責任ヲマカセル 実質的ニハ民主的ニ」と書込んでいるが、「民主的」にしたので権限集中ができなかったと考えていたのだろうか。「委任的独裁政権」と当時言われた加藤執行部にして、出発点で権限を自分に委任させること、最後に責任を取ることができなかった。総長代行に責任をまかせた教官が責任を負わない「無責任の体系」が成立した。11月10日、28日の評議会で信任投票を再度して権限を集中したはずの加藤代行は、大詰めで文学部処分の白紙撤回を呑む権限がなかったし、責任をまかせて無責任になった文学部長から足を引っ張られた。

もう一つの助手の動きは、農学部助手の岡本雅美が朝日新聞<sup>たかお</sup>島田尚男記者を通じて篠原一經由で鈴木成文に接触してきたことだった。12月21日に鈴木は岡本と会い、共闘の組織はセクト中心ではなくノンセクトが中心であり、共闘向けの内容で一般学生および民青と収拾しても、ノンセクト中心の共闘は大掃除できず、加藤が時計台に乗込むしかないと聞かされた。その岡本と21-23日に何度も電話して、加藤代行が時計台のなかの指導者(山本、今井、三吉、最首)と話したいのなら、七項目要求について「6/7」ではなく「8/7を呑む」ことが予め明らかにならなければだめで、そのメモを岡本がとりつぐという(8/7とは七項目要求貫徹+8・10告示廃止だろうか)。23日に





い。つまり、山本や最首たちとだけ会うことを申入れたのではなく、団交をするつもりであった。先方へ乗り込むつもりであった」という（写真2）。

さて、ここから加藤一郎総長代行と大内力総長代行代理が4補佐と回想した会議の記録を用いて述べる。加藤執行部の回想会議記録は、2014年1月30日放送の「東大紛争秘録——四五年目の真実」で広く知られた（<http://www.nhk.or.jp/gendai/articles/3461/1.html>）。これは、1970年6月7日ころ2日間開かれた会議の記録らしく、藤井隆前理学部長が定年教授と呼ばれているから1970年4月より前の会議ではないだろう。おそらく東大闘争裁判で起訴された611被告中統一公判を要求した336被告のうち、1970年2月中旬に法廷闘争の方針を転換した85被告（分割公判反対「貫徹組」に対する「転換組」）が5月20日から法廷での反証に入ったこと（朝日新聞700520）に対応したものであろう。鈴木が作成した「補佐の記録」（「東大紛争回顧録」ⅠⅡⅢ）をもとに加藤一郎と大内力が主に語った会議では、加藤執行部成立前の10月26日の評議会から安田講堂の攻防で入試中止が最終的に決まるまで、ほぼ時間順に録音テープ9巻中8巻分で回想した。文学部処分問題については、11/13新教育学部長の大田に「これは放置できないので、何とか何かの方法を考えたい」と加藤が語ったこと、11/18の全共闘との公開予備折衝で文学部処分問題を議論して加藤執行部の従前イメージが変わったこと、しかし文学部の林学部長や堀米評議員が処分問題は譲れないと強硬だったことなどが語られている。

この回想会議の記録の最後の9巻では、「12月の終わりの最首を通じての交渉」が振返られている。12月23日に岡本ラインから話があり、大内がメモを書いた。大内は、文学部処分について今までと同じことではだめだ、越権を十分知りながら、「仲野君の処分自体については、右のような処分制度の変更にかけて再検討する用意がある」と書いた。文学部がひっかかると思うことをわざと書いて、「これはちょっと受け入れられたら、あとまたえらい面があると思ったけれども、まあやっちゃえ」、「文学部は多少むくれても押し切ろうという腹をきめて書いたのです」。福武は、共闘への申入れと並行して文学部を説得し、そこまで行く見通しがついていたと語ったが、前述の23日夕方、文学部処分を何とかしろと堀米に意見を述べたことだろうか。しかし25日夜の山本義隆の記者会見で、最後の申入れのメモ内容が先に出たので、文学部長らが怒ったという。

その申入書とメモは、返却された原本がこの回想会議で示されたようだが、3枚の便箋に次のように記されている（東京大学法学部近代日本法政史料センター原資料部の加藤一郎関係文書）。

#### 申入書

諸君の要求項目につき、諸君の考え方をもう一度よく聞き、それに対するこちら側の新たな考え方に立った意見を述べ、相互の一致点を見出すために努力する機会を早急にもちたいと考える。その時期・場所・出席者については協議してきめたい。

昭和四十三年十二月二十三日

総長代行 加藤一郎

共闘会議 御中〔以上1枚め〕

新しい考え方とここでいうのはたとえばつぎのような諸点である。

(a) 医学部処分が客観的に政治的処分の意味をもったことは否定しない。



(b) 文学部処分について、

(1) それがいわゆる「教育的処分」の問題点を明確にしたものであり、旧来の処分制度は教授会の主観的意図にかかわらず、学生の自治活動への規制手段となる危険性の大きいものであったことは認める。したがってわれわれはこれまでの処分制度を大幅に改め、大学の構成員の参加した処分制度を樹立したいと考える。

(2) 仲野君の処分自体については、右のような処分制度の変更の上に立って再検討する用意がある。

(c) 八・一〇告示については、すでにすべての内容が失なわれていると考えるが、一定の時期においてこれを廃止してさしつかえないと考える。

(d) 医学部の責任問題については評議会において善処する用意がある。

(e) 矢内原三原則の停止はすでにきめているが、いわゆる「東大パンフ」についても〔以上2枚め〕これを廃棄したうえ、学生の権利を大学の中において正当に位置づけるつもりである。

加藤は、23日、島地を通して岡本に連絡し、夜10時過ぎ時計台から来た最首に話し合いを申入れ、申入書とメモを渡したところ、11時半に申入れは受けたという返答があり、翌日返事するとして、メモを返してきた。翌24日夜11時に松田智雄交渉委員長に拒否回答があり、加藤は最首と電話で30分くらい話したが、最首は「代表者会議でずいぶん議論したけれども、会わないことにきめた。新しい提案の内容も思想的には従来と変わらない。それで信用はできない」と言った。残った問題点は二つ、8・10告示撤回問題つまり医学部処分が政治的弾圧だと認めるとい問題と文学部処分問題で、加藤は「文学部処分のほうは、これは向こうもそれほど本気ではないだろうと思ってい

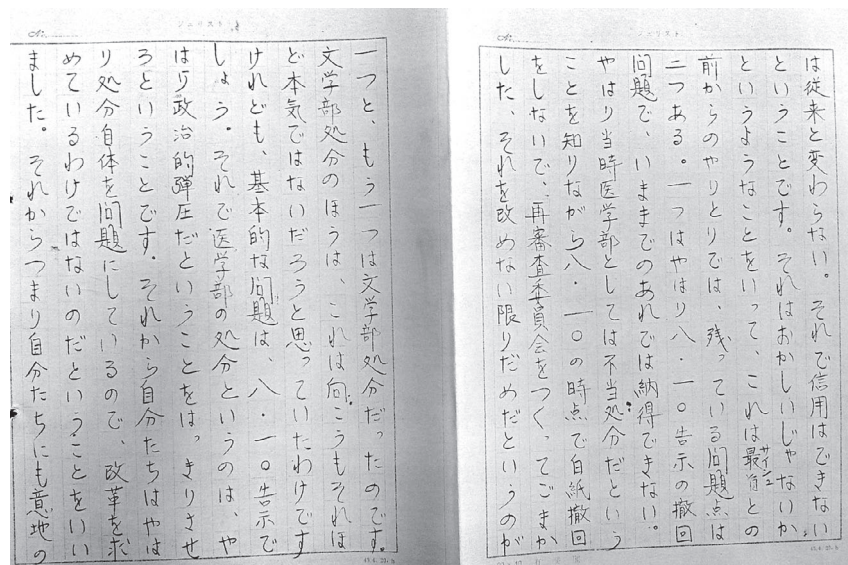


写真3 加藤執行部「回想会議記録」

1968年12月24日のこと、1970年6月7日ころ会議、  
東京大学文書館所蔵（福武直関係資料）

たわけですけども」，最首は「自分たちはやはり処分自体を問題にしているので，改革を求めているわけではないのだ」と言ったという（写真3）。加藤は「できれば共闘を巻き込んで全学集会に持っていきたいということでだいふ努力をした」が，これで民青ほかの七学部集会に乗ろうと決心した。その24日夜は，七学部代表団のうち無党派的な経工の代表と2時過ぎまで議論して，藤岡克次や町村信孝や波多野琢磨が共闘的な発言をしたという。翌25日の朝，最首との電話のことを話した加藤は，「これで切れた」と植村に言ったという。

加藤執行部から共闘会議への働きかけはそれで終わった。もう一回くらいチャンスがあると向こうは思っていたようだが，こちらは「これが最後だと思ってメモを送った」，ただ最後だと言えば破壊や抵抗を始めるだろうから，最後だとは言わなかったという。あと，この前後，戸塚を通じて聞いたこととして，加藤が大内が安田講堂に乗り込んだら，一番中心的な文学部処分問題と告示問題の解決の糸口ができるかもしれない，社研の神林助手が案内すると言っていると話があり，神林は福武の家にも来た人だったが，大内は見送ったと振返った。そのようにして12月26日からは，先に共闘に示した提案を文書にした「基本的見解」を七学部代表団に示し，七学部集会へ向かって進んだ。1月8日夜，加藤と坂本が最首と岡本に会ったとき，最首は「共闘も悪いのです」と言ったという。「最首はあるいはこの二十三日のメモぐらいのところで議論をやろうという気だったんじゃないかと思う，ぼくの推測だけれども」と加藤。共闘も悪いとは他人事のようなのだが，最首は共闘の一人として，代表者会議の議論を転換できなかったことを悔んでいたのだろうか。条件出してるやつを相手にするつもりはなかったとしても，話し合うことは拒否しない方がよかったということだろうか。

12月24日の代表者会議では何人が集まり，どのような議論をしたのだろうか。安田講堂では8月以来，反帝学評，フロント，革マル，青医連（今井，三吉），全闘連（山本）の代表6人の事務局会議がセクト間共闘を調整していたが，11月22日の集会で学生大衆の不満が高まり，それから1月18日の機動隊導入直前まで，代表者会議という大衆集会で決定することが行なわれたという（宇佐美承「巷に出た山本義隆君のこと」701115『朝日ジャーナル』）。回想会議記録では，この最後の申し入れと拒否回答について「その経緯は共闘でもほとんど知らないのです」と坂本が追及集会の経験を話し，「代表者会議というのは少ないのかな」と加藤，「かなりボス交的なものだったと思います」と坂本が言った。しかし12月23日に全共闘に話し合いを申し入れて拒否されたことは弘報委員会「資料」第11号（690108）に記されていたし，理系博士3年の長田保正が「一二月何日でしたか，全共闘に加藤が最後の申し入れをしてくる，その申し入れは全共闘代表者会議にかけて，一応問題にならないとけた」と語ったくらいには知られていた（『砦の上にわれらの世界を』6904，475頁。あるいは長田保正は山本義隆の別名か）。前述のように，毎日新聞25日夕刊が「共闘会議との“秘密折衝”が二十四日夜，決裂」と報じたのを説明するためだろう，その夜10時半に山本義隆も記者会見したが，代表者会議の様子までは報じられなかった。

### ③……………東大紛争の収拾と文学部紛争

加藤代行は，共闘会議との話し合いによる紛争の解決をめざしていただろうが，七学部代表団と

の交渉による紛争の収拾へ進んだ。12月26日の「基本的見解」では、12月2日の「提案」をもとに、文学部処分などで前述のようにかなり譲歩した。「補佐の記録」では、これ以後加藤執行部への風当たりが強くなったという。12月27日に福武が所属の文学部で仲野の復権を力説したら、学生関係の第二委員（委員長は田中良久）と堀米が問題にもせず、林も学部長会議から帰ってきて「もうこれ以上……」と言ったという。加藤執行部としては仲野の復権なら「当時としては妥当であった」ことになり、文学部のためにもいいだろうと考えていたが、文学部教授会としては新制度の下でも仲野の事件は処分に値するという意見であり、11月の強硬論からやっと再審査に応じるところまで動いたが、再審査しても処分に値するという考えは変らなかったという。また、同日出会った法学部の福田歓一から「無意味な譲歩だ」と強いことを言われ、福武は反論したという。法学部は23日の法研封鎖で強硬になり、26日の「基本的見解」で加藤執行部とますます合わなくなったという。

加藤代行は、12月29日の坂田文相との会談で、入試をいちおう中止としながら実施に含みを残した。1969年1月4日には「一月一五日頃までの半月間、入学試験実施のために、全学をあげて最後の努力をつくす決意」を再び表明し、東京大学の「存亡の岐路」を訴えた（「大学の危機の克服をめざして」）。9日には共闘と民青の乱闘があり、機動隊を再度導入した。10日に七学部代表団学生約50名と教職員約1500名、学生約7500名で七学部集会を開催し、それから代表団学生と十項目（26細目）の確認書を作成し、翌日までに各学部学生代表が各細目ごとに署名した。

1月10日の七学部代表団との確認書は、学生の団交権と教授学生職員の協議会的なものを民青が最後に突如入れた項目九と十を別にすれば、12月26日の「基本的見解」を維持したものだ。項目二（細目5）の文学部処分については、「大学当局は、この処分が従来の「教育的処分」という発想に基づいて行なわれた点において、旧来の処分制度への反省の契機となったことを認め、新しい処分観と処分制度のもとで再検討する。」これと細目7 林学部長事件については、七学部代表が全部不署名だったので、確認書から外された。それは、文学部処分の再検討に不賛成だったことを意味したのかと思っていたら違った。各学部代表団は全員一致した項目だけ署名し、一致しなかった項目は不署名としたからだった。たとえば法学部代表団では細目5について法懇が署名、民青が不署名とした（丸山眞男文庫959-41-1「丸山自筆メモ」）ので結局不署名であり、おそらくどの学部代表団でも民青がいる限り不署名だった。法闘委から右翼と言われた法懇さえ、文学部処分の不当は認めたようだ。共闘と対立した民青がもっぱら、文学部処分問題を確認書から抹消したということができる。

1月18, 19日、機動隊導入によって安田講堂などが封鎖解除され、20日に入試中止が最終決定されたのち、いわゆる正常化が進められた。確認書については、自民党や政府からも批判があったが、法学部教授会の委員会が批判的報告書「確認書」の内容の問題点を発表した（690125毎日）。「補佐の記録」によれば、福田歓一が表面に出ないで堀米庸三や玉野井芳郎らと確認書の承認に反対し、丸山眞男ら46名の署名を集めた要望書（回想会議で大内が言った「タカ派文書」）を2月4日に出したが不発に終わった。加藤代行は、1月28日に「七学部代表団との「確認書」について」（未定稿）を発表し、同日から2月9日までほぼ隔日の評議会で審議し、11日に七学部代表団と全部署名の15細目について最終確認書を作成した。



いわゆる正常化の過程で共闘会議の活動家が排除されていった。1月9日経済学部で51(うち東大学生16)人、10日神宮外苑で149(同52)人、18日安田講堂以外で311(同30)人、19日安田講堂で456(同68)人、2月4日正門前で6人、2月12日文学部大教室で1人(19日逮捕)、3月4日駒場教職員会館で41人(うち助手1人)、4月28日沖縄デーで82人、9月5日日比谷公会堂で1人が逮捕された(主に加藤一郎関係文書。週れば68年10月14日医

学部で1人)。最後の山本義隆は、1月20日に1月9日別件で逮捕状が出て潜行せざるをえなかった。しかし全共闘の残党ばかりか、新たに全共闘に加わる無党派学生が出て、紛争が解決しないままの授業再開に抗議した。授業は、文学部以外の各学部では、1月下旬から3月にかけて再開された(医学部は5月末)。

文学部では、学友会委員長や書記長ら6人が2月4日に逮捕されたが、それでも学生はストをやめなかったし、人文系大学院の学生も活動を強めた。2月5日の人文系斗争委員会糾弾資料(写真4, B4紙17枚)は、配布中止の文学部教授会「仲野雅君の処分問題について」(68年12月1日)や加藤代行への「要望書」(68年11月20日)や文学部長林健太郎「文学部学生諸君へ」(69年1月27日)や「確認書」関係の当局文書何点かを含み、次の大学院学生ビラも収めている。人文系闘争委員会「闘」2号(68年12月21日)は、「明らかな政治的処分としての仲野処分を敢行した文学部教授会は、その処分の不当性を認めないのみならず、十一月二十日には「暴力」反対一本槍の教授会メンバー有志の要望書を評議会に出す始末である」として、修士論文ボイコットを宣言したし、1月31日(大学院入試の願書受付締切の日)の人文系大学院志望者連絡会議「大学院進学に際しても斗争態勢を堅持せよ!」は、入試強行を阻止することを訴えた。そのように学生たちは、文学部教授会が公表を中止した仲野処分の事実と権利を問うていた。

2月6日の文学部長林健太郎名の文書「いわゆる文学部処分について」は、10日教授会で学生向け配布が承認され、20日の弘報委員会「資料」第18号に掲載された。しかし処分の対象はどのような行為だったのか、「明らかに不当と認められた」と記す以外、全く論じなかった。行為の事実を問うこと、処分の正当性を問うことを封じるかのように。ただ、「加藤総長代行の「提案」や「基本的見解」また「確認書」の解説においても、この処分が当時の手続や基準から見て正当になされたものであることが明記されています。従って医学部の場合のように、教授側が処分を白紙撤回して謝罪するということはここでは起り得ません。」「この処分は一〇月四日における同君の行為が明らかに不当と認められたが故になされたものであって、それ以外の理由は全然ありません。」「N君の処分は現行制度の下で行なわれたものでありますから、それがいわゆる一方的な処分であったことは否定しませんが、しかもそれは新しい制度の下でも当然問題となるべき「大学という研究・教

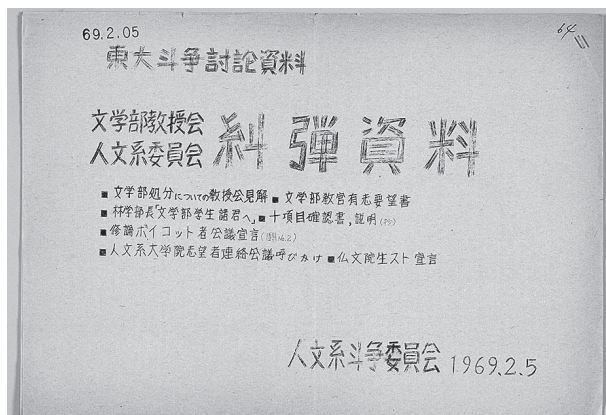


写真4 ビラ集「人文系斗争委員会糾弾資料」表紙

1969年2月5日, 国立歴史民俗博物館所蔵  
(東大闘争資料集)



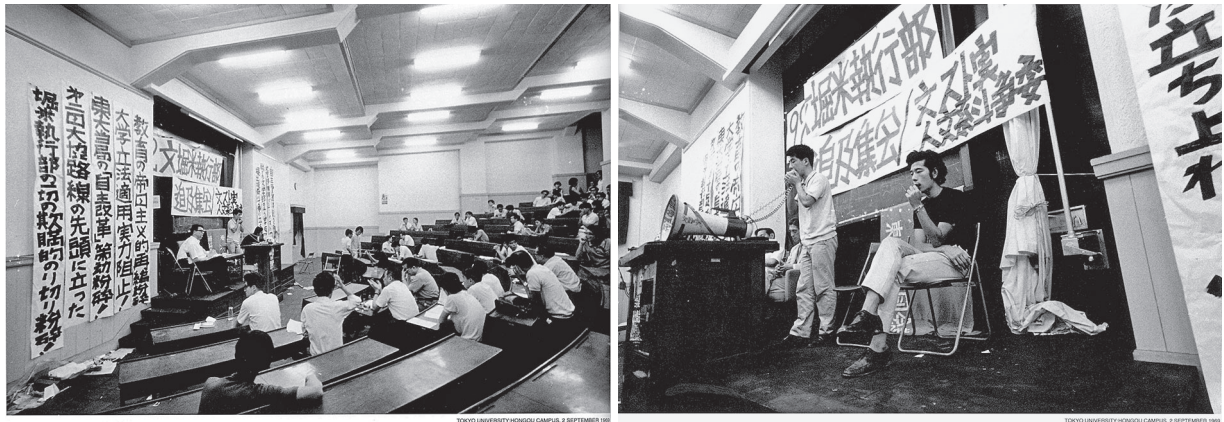


写真 5・6 文学部階段教室での堀米執行部追及集会

1969年9月2日, 平沢豊『OTHER VOICES 東大全闘・68-70』2004年12月

育の場に必要の規律の違反」(加藤「基本的見解」)にかかわるものであったと我々は確信しています。しかし新しい制度が成立した時にその基準に照らしてこれを再検討することを我々が辞しないのは既に述べた通りであります。」「この処分の白紙撤回を掲げてストライキを続けることの可否については、私は学生諸君自身の判断に委せます。」

加藤一郎は、3月9日、「「七学部代表団との確認書」の解説」を配布した(同名冊子 690327)。文学部処分については、学生側が全部不署名のため確認書から削除するとしながら、この処分は「当時の手続きや基準からみて正当になされたもの」だから、医学部処分とは異なり「白紙撤回はしない」、しかし「新しい処分観や処分制度のもとで再検討する」ことを確認書ではっきりさせたとした。「いわゆる文学部処分とは、一九六七年一〇月四日の文学部協議会の閉会後に、退席しようとした T 教官を学生の N 君が阻止しようとして、そのネクタイをつかみ、罵詈雑言をあげたという事件に対して、同年一二月に N 君を(無期)停学処分にしたというものである。その後 N 君については、一九六八年九月にその処分が解除されている」と説明した。「この事件についての文学部のいちおうの見解」は、68 年 10 月 28 日の「文学部の学生処分について」以外になかったから、扉内の退席阻止として仲野の行為を論じるしかなかっただろう。

スト中の文学部では、各学科で個性的な文書が作成された。国語国文学大学院自治会編『擬制の地平が亀裂する——東大闘争が学問の首の切り口を覗くとき』(6906)は、国語国文の各教官を批判するなかで、「粗暴なだけがとりえの暴力教官・築島」と記した。築島はそうのように罵られても堪られたらうか。7月7日の文学部教授会で、仲野雅の処分対象行為について、先に手をかけたのは仲野ではなく築島だったという事実、仲野の行為は扉内の退席阻止だと知らされていた教官にとっては新事実が報告されたという。7月14日から補講授業が再開されたが、20 数名の教官が授業再開を拒否した。9月2日には堀米執行部追及集会が階段教室で開かれた(写真 5・6)。

文学部当局は、仲野処分を消去するという方向を示した。8月6日に岩崎武雄に代って文学部長となった堀米庸三(評議員は福武直、井上光貞)は、夏休み中の検討を経て9月5日、処分問題についての教授会の討議結果を公表し、「旧処分制度への批判的訣別」と「N 君処分を消去するという方向」へ教授会は態度変更しようとした。堀米文学部長は、9月26日付の書簡「紛争の解決につ

いて文学部学生諸君に訴える」で、N君処分の消去とは、「処分は誤りであつたが故に取消すべきである」という「白紙撤回」と同一ではなく、「N君の処分が、当時の基準に照らして適法に行われたという当初の見解を依然として変えてはいない」が、旧来のパターンリスティックな「教育的処分観」「教育的処分制度」を変革し、「教官・学生相互間の不信関係を除去する」ために、あえて撤回する、「すでにN君の処分は昨年9月4日に解除されているので、いまこの撤回を行うことによつて、N君は完全に復権する」とした（『学内広報』690929）。

9月6日には国文科追及集會に築島と仲野が初めて同席し、二人の行為が検討された。国文学大学院生藤井貞和の文書「文処分の根本的疑問」（691001）には、室外に出た築島は「中にいる先生方をたすけ出そうとしてドアのところにいるうしろ向きの学生の背広のそで口をつかんでひっぱった」、「その学生が築島教官の胸もとをつかみ、ネクタイをしめあげて「何するんだよう」などと暴言をはいた」と記録されている（折原浩『東京大学』93頁から孫引き）。そのように二人の対質のうでで事実を検討することもしないで、文学部長は処分を消去し、しかも処分は適法だったと主張しつづけた。

文学部当局は、1969年10月9日に機動隊を導入して、学生の研究室封鎖を解除した。教養学部助教授の折原浩は、文学部への機動隊導入に抗議して「東大文学部問題の真相」を執筆し、『朝日ジャーナル』（691026、発売は9日前）に発表した。「築島助教授および当時の文学部執行部は、「築島助教授が先に仲野君に手をかけた」という先述の重大な事実を秘匿して同僚をだまし、したがって文学部教授会と総長・評議会は、事実経過に関する正確な認識なしに、処分を決定し、医学部処分の轍を踏んだのである。」その築島先手の事実の誤認だけでなく、仲野本人から実質的に事情聴取を欠いた点でも、仲野処分は違法処分だとした。

これに対して文学部長の堀米庸三は、同誌次号（691102）に「折原論文に事実の誤り」を投稿した。折原が「いわゆる「文学部処分」を「医学部処分」と同じ違法処分であると断じ」たが、「T教官の行為」は「自然に生じた制止行為」であり、「先に手をかけた」といった疑惑をよびおこさせるような性質のものではなかった」ことは67年10月4日当日の教授会でT教官自身によって報告されているから、「N君にたいする処分の適法性をなんらそこなうものではない」と反論した。仲野から事情聴取をしないまま、争いあう一方の言い分だけで事実を論じた。

折原は、同誌次号（691109）への投稿「堀米反駁を論駁する」で、藤井貞和文書「文処分の根本的疑問」を引用して、事実の隠蔽を批判した。堀米に対しては、築島先手の事実を文学部責任者として初めて公式に確認したとして、「この間の文学部教授会、学部長会議、評議会の議事録を全面公開して正否を争う方向で努力していただきたい」と望んだ。先手後手の検証は容易でないとしても、どのような行為が処分されたのか、折原は事実を問うていた。しかしすでに処分を消去した堀米は、処分対象の行為の事実を争うつもりはなかった。もし評議会記録が情報公開されていたら、1967年12月の山本達郎学部長による仲野の行為の誇大説明と一か月後の修正が明らかになり、大きな問題となっていただろう。

文学部は、10月13日から授業を再開したが、学生の抗議が続いた。堀米文学部長名の警告書が全共闘学生約30人に名ざして送られたと新聞で引用された。「諸君の行なった破壊のあともなまなましい、法文一号館の中に立って、私は諸君の行為のあさましさと、みにくさに、あらためて深い

いきどおりをおぼえた。諸君がいかにその志操の高潔さを誇ろうとも、諸君の現実の行為は常にそれを裏切り、諸君の独善と孤立を深めるのみである」(朝日新聞 691120 夕)。長く続く紛争にうんざりした学生のなかには、抗議する学生に、またかよと言う者も少なくなかっただろう。1969 年 12 月 15 日の新学期からストは解除され、ほぼ平常に戻った。

#### ④……………文学部処分問題のその後

文学部スト解除から一年近く、長谷川宏は、数人の仲間と討論を続けて、二つの総括文書「文学部闘争——敗北の総括」「学問批判」を執筆した(70 暮)。69 年 1 月の安田決戦、2-3 月の院生大会と大学院入試強行粉碎闘争、7 月の補講粉碎闘争、9 月の「処分をなかったことにする消去案」(「撤回する」が「それは諸君のいう撤回ではない」という苦肉の策)以後、それまで対決してきた教官が秩序の壁の向こうに全く姿を消したという。正当な要求を貫徹する見込みがあったかといえは展望はなかった、「文学部処分ひとつをとってみても、処分の不当性は文学部学生の大半の確認するところであったにもかかわらず、それが教授会の権威や責任にふれる問題としてうかびあがってくるや、教授会はその正否を論理の土俵であらそおうとせず、みずから保有するさまざまな生殺与奪の権限を駆使して、卒業証書か処分の不当性かという権力の土俵を設定してきたのであった。」それでも「二ヵ月にわたる消耗な授業粉碎闘争」をたたかったが、12 月のストライキ解除によって敗北し、秩序への帰順を大衆的に合意した。秩序への屈服を余儀なくされた個々人は、「平穏な日常性のなかで、大学の支配秩序にたいする徹底的な抵抗を決意した人間はどう生きればいいのか」という問いと対決しなければならなかった。

長谷川の第二文書「学問批判」によれば、それは知性への問いでもあった。「東大という特権的な世界に安住し、その特権性のうちにひそむ全社会的な差別と疎外に気づくことさえもない、矯められ馴致され無気力となった大学の知性が、知性本来の力づよさ、みずみずしさ、攻撃性、批判精神をとりもどす」ためには、これまでの研究は否定されるべきものではないかという問いを発しなければならなかった。68 年 12 月 2 日に加藤提案が現れるまで、「文学部の仲野処分は教育的処分として正当であったという主張」が文学部教授会によって繰返されたが、それが論理的に破綻することは目に見えていた。「教育的処分」という観点を抹消した加藤一郎の近代化路線の特質は「知性を細分化された専門分野におしこめ、全体の秩序は真に科学的な知性の対極にある没価値的な規律によって維持する」ところにあった。「全共闘運動はまさに近代化され墮落した知性を告発し糾弾し解体しようとした」。大学教官の知的荒廃や知的誠実性の欠如は明らかだったが、正常な授業、正常な研究が行なわれているいま、「われわれは知的誠実性をつらぬきえたか。」「闘争の政治的敗北」が必然だったとしても「知的敗北」も必然だったのだろうか。長谷川は、「経済的に多少不利な条件のもとにおかれるとしても、大学のそとで知的営為にたずさわるほうがまだしも人間的に、学問的にすくいがあるように見える」と考え、そのように生きた。「抵抗の持続」(8310『批評精神』)で東大闘争の後退期を主に論じ、この二文書に触れた<sup>(6)</sup>。

文学部ストが終ってほぼ二年、林健太郎は、「あの東大紛争を一応過去のものとして眺める」という観点から「東大紛争雑感」(7111『心』)を発表した。文学部処分は、67 年 10 月 4 日文協の閉



会後「「オブザーバー」の学生たちが教授たちを部屋に閉じ込めて外に出すまいとした。そこで一足先に出ていた築島助教授が部屋の外を固めていた学生たちを排して中の教授を外に出そうとしたところ、Nという学生がふり向き様築島さんのネクタイをつかんで小突いたという事件」が発端であり、「学生の本分にもとる」行為としてNは処分された。共闘派は、68年11月に林が閉じこめられた「団交」で、「そもそも教授会が一方的に学生の処分をきめたことがけしからん」と主張し、副次的な主張としては「教官側が先に暴力をふるったのであって、それを問題にしないでNだけを処分したのは不当だ」という事実問題も持ち出した。そのとき林は、「会が終って教授会に赴こうとする教官たちを行かせまいとして自由を拘束したのがそもそも不当である。従って教官たちの途をあけるためにNの手を引っぱったことは暴力などと呼ぶべきものではない」と答えた。「東大教養学部」の折原浩助教授はこの紛争中しばしば声明を発して文学部を非難したが、その中で、文学部当局が教官側の暴力を努めて隠蔽したというようなことを云っている。しかしこれはまちがいである。この事件の当日起ったことはその直後ありのままに教授会に報告されており、「団交」の席上で私がはっきり云ったことである。」（69年9月の堀米文学部長の書簡でも「同様の見解」が述べられていると林は追記したが、そこでも築島と仲野の行為の事実は全く論じられていない。）

そのように林は、紛争が終って二年後に初めて、文学部処分の対象となった事実を論じ、仲野が部屋外で築島を「小突いた」と記すとともに、築島先手の事実も一応認めた。たしかに68年11月上旬の「団交」でその事実に触れたことはあるが、68年10月28日の「文学部の学生処分について」の扉内の退席阻止という説明を公式には改めなかったし、69年1,2月の林文学部長名の二文書でも論じなかった。紛争中に事実問題を議論していたら、処分の権利問題と密接に関連しただろうし、副次的と片づけることもできなかっただろう。紛争が終ってから、先手後手の事実認識は本質的な問題ではなく、そもそも学生たちの自由拘束が不当だから、築島の先手は不当ではないと論じた。それならストでピケを張る学生に教官が暴力をふるうのも不当でなくなるだろう。逆に、築島先手が事実だったとしたら、仲野が築島を「小突いた」のは不当だろうか。その処分は正当だろうか。適法だっただろうか。かつて「東大紛争の一年」（7001『文藝春秋』）で、「全共闘の学生諸君、諸君はえらいようなことをいってもやはり子供の世界に生きている。大人の世界はムゴいものだ」と述べた林は、紛争中は処分対象の行為の事実を論じず、「隠蔽」と言えるかは見方によっても、紛争二年後に論じるのだからたしかにムゴい。1973年1月に加藤一郎が総長再選を辞退したのち、2月13日の総長選挙二回めで林が選ばれ、4月から総長となったのは、長い紛争で反動が生じていた東大の多数教官がムゴい人を支持したということだろうか。その1973年4月に私（清水）は大学に入ったが、それまで大学生が何を暴れているのか不思議でならない中学生であり、高校生だった。

1971年には東大闘争裁判の法廷審理が進み、加藤一郎は、東京地裁で八度（72年にも二度）証言した。71年4月30日には、68年12月23日の全共闘に対する最後の申入れに触れ、それに添えたメモを読み上げた。折原浩『東京大学』（7311, 285頁）には「加藤メモ」が引用されており、上掲の原物とは漢字が二、三違っているが、これが活字ではおそらく唯一の資料となった。また、同日の法廷で尾崎被告人が文学部処分の対象になった行為について加藤一郎証人に質問し、今日から見れば核心を衝く問答をした（加藤一郎関係資料）。「処分の時の評議会の内容では、処分理由はどういうふうになってたのでしょうか。」加藤「それはちょっと私は記憶しておりません。私は出て



おりませんし。」「その当時の…」加藤「その当時の評議会の記録は見えておりません。」「十分に調べるとおっしゃいましたけれども、処分されたとき、どういう理由で処分されたということは、調べなくてもよろしいのでしょうか。」加藤「それは今言ったようなことは、評議会の記録というのは、そういうことはあまり細かく書いてありませんから。実際にその衝にあたった文学部の人に聞くのが一番よく事実関係は分ると。」1967年12月19日の評議会の記録が修正されているのを加藤が総長代行時に見ていたら、その後の経過は違っていたのではないかと。

この裁判で特別弁護人を務めた折原は、73年1月18、19日の最終弁論をもとにした『東京大学』で、この加藤メモの内容は別に「新たな考え方」ではないと論じた。文学部処分問題について「制度の問題にすりかえて「再検討」を示唆する発想」は12月2日加藤提案に現れていたし、「文学部教授会ですら訂正している事実誤認」を加藤メモは正さなかったからという。しかし実際には、12月2日加藤提案は再検討の示唆すらできなかったし、文学部教授会も12月1日文書を配布中止としたから事実認識を訂正してはいなかった。ともかく折原が、「七項目のうちのひとつ（文学部処分白紙撤回）すらのまない「加藤メモ」を手渡ししながら、仰々しく「話し合い」を「申し入れ」という事実は、全共闘に拒否されることを承知のうえで、いなむしろ、全共闘に拒否させて、「話し合い」途絶の責任を形式的に全共闘側に転嫁し、「切り落とし」方針を正当化するマヌーバーとして、これをおこなった」と手厳しく解釈したのは、東大闘争をたたかった者の実感からだろう。

東大闘争裁判は、安田講堂Bグループ25名の場合、73年1月に弁護団および特別弁護人の最終弁論、4月6日に木梨判決があり、74年2月に14名が控訴した。77年2月18日の被告人最終意見陳述は、陳述書の大半を文学部処分問題に当て、文学部処分の事実認定と適法性を問題とした。退席阻止や仲野先手という事実誤認を改めて指摘し、とくに69年8月の文学部処分問題検討委員会の報告書が処分理由を「非礼」から「暴力」に変更したのち廃棄され、9月5日に処分が「消去」された経緯に新たに触れた。77年6月30日の横川判決は、「被告人らを本件に駆りたてた当初の行動目的のうちに、正しいものへの指向がふくまれていたことは否定できないが、被告人らが、この目的実現のためにとった手段が、現行法上は認められる、やむをえないものと認めることは困難である」として論旨を斥けた。被告人たちは、「加藤執行部は全共闘の要求をほとんどのんだ、六・五項目を認めた」という第一審の論理を粉砕するべく控訴したが、その訴えに耳を傾ける裁判所ではなかった（東大闘争統一被告団（自立社）資料編集委員会『資料・東大裁判闘争』7807）。

それから幾星霜、加藤一郎は、大崎仁を聞き手に、共闘への最後の申し入れを回想した（「東京大学の紛争」8911ff『IDE』、9108『「大学紛争」を語る』）。「一二月二三日には本部を本郷の農学部長室に置いていまして、そこで、大内さんと相談して、最終的に共闘に申し入れをして平和裡に解決できないかというんで、二六日の文書のもとになるものを、二三日に共闘系に渡して検討してくれと言ったわけです。／共闘に渡った提案については、翌二四日に、共闘系が安田講堂で大衆討議を開いて、夜中までやっていたのですよ。おそらく幹部はそれでまとめるつもりだったと思うのですが、大衆討議ではそれは通らなかった。共闘というのは組織なき大衆グループで、そこに学生にアピールするところがあったのですが、大衆討議となると、どうしても強硬意見が勝ちを占めて、まとまらなくなっていくわけです。その夜一二時前に、私がいるところへ、連絡に当たっていた共闘系の幹部から電話がかかりまして、「残念ですがだめでした」ということでした。これが、

あとで言えば、最後の解決のチャンスだったわけで、ここで最終的な決裂ということになったんですね。いま考えても残念なことでした。」

加藤一郎は、1995年9月2日放送の戦後50年番組の取材でも、最後の申入れが拒否されたことが残念だとして、最首悟の名前は出さないで、12月24日夜と1月8日夜の言葉に触れている。「全共闘のような組織で大衆討議にかけると、やはりラディカルというか、強い議論のほうが優勢になってしまい、どこかで矛を収めようというような議論は通りにくいんです。それがああいう大衆組織の一つの限界だと思いますね。討議の結果を僕のところへ電話してきてくれた全共闘の幹部は、『残念ですが、まとまりませんでした』というような言い方をしました。その後、一月に入ってから、全共闘の人と個人的に会ったりしましたが、その人は『全共闘も悪いんですよ』と言って、結局まとまらなかったことを残念がっていたようでした。安田事件の起こる前に全共闘のほうも何か手を打つべきだったと私は思いますけれども……。ただ、それは運動の勢いがありましたから、止めることはなかなか難しかったでしょう」（『戦後50年その時日本は』3〔東大全共闘26年後の証言〕、9511、331頁。なお、取材班が12月23日のメモとして引用しているのは26日の「基本的見解」の一節）。

## ⑤……………文学部処分の白紙還元説

これまで論じてきた文書のなかには、文学部処分の「白紙還元」と記されたものはなかった。しかし文学部処分の「白紙撤回」はできないが新制度のもとで再検討するという考え方、68年12月23日の加藤メモやそれを敷衍した12月26日の「基本的見解」で含意されたように、文学部処分は適法だったが仲野は復権するという考え方はあった。それを「白紙還元」と呼ぶことはできるだろうか。後年その言葉が語られ注目されるようになった経緯から述べたい。

1993年に鈴木貞美は、「四半世紀ののちに…」(9308『海燕』)で、全共闘運動とは何だったのか、東大闘争の決定的な局面はどこだったのかと問い直した。文学部の革マル派中心のスト実で活動した自分や党派から距離をとって、ただほとんど記憶だけに頼って考察したところでは、「東大全共闘は、処分撤回などの「七項目要求」を掲げていた。大学側は、全学部の大衆団交を開き、それをほぼ全部受け入ると腹を括るところまでいった。ただ、文学部の処分は「撤回」ではなく、「白紙還元」とした。大学側としては、最後の切り札として示した回答だった。」「この回答に対して、「闘争全面勝利」とする幕引が東大全共闘の中核で検討された。それは当時の活動家なら、みな知っていることだ。」「いまにして言えば、私はこれは正しい方針ではなかったか、と思う。要求を掲げている以上、どこかで妥結しない闘争などありえない。しかし、どこかで、東大闘争は、終えてはならない闘争になってしまっていた。」「撤回」となっていないのに、「撤回」と読み替えて幕を引く方針を出すならば、それだけで、妥協的姿勢を非難される。」文学部の革マル派は、「党派の利害追求」から、「東大闘争の旗を降ろすことは決定的に不利になる」と計算した。東大闘争は、新左翼の反権力闘争と党派抗争の様相を強めていった。「東大全共闘は、そのようにして自ら闘争の泥沼化を選び、権力による弾圧と日本共産党の学生組織を主力とした正常化を望む勢力に屈服して、敗北した。」

2009年に小熊英二は、『1968』（0907, 895f 頁）で次のように記した。「一二月二三日、加藤総長代行は、全共闘に再度の予備折衝を申し入れた。すでに七項目要求のうち六項目は受諾され、文学部処分問題も「白紙還元」する提案がなされた。東大全共闘にとって、これが「勝利」をうたう最後の機会なのは明らかだった。／文学部の革マル派活動家だった鈴木貞美は、こう回想している。<sup>(255)</sup>〔上記とほぼ重なる引用〕／しかし、東大全共闘はこの加藤代行の提案を蹴った。加藤の回想によると、仲介していた全共闘幹部から、二四日午後一時すぎ、「残念ですが、まとまりませんでした」と電話があったという。加藤は後年、「その人は『全共闘も悪いんですよ』と言って、結局まとまらなかったことを残念がっていたようでした」と述べている。<sup>(256)</sup>／この「政治的には信じ難い愚行」を、なぜ東大全共闘は行なったのか。」このうち注255の内藤国夫『ドキュメント東大紛争』（6904）には「白紙還元」の文字はなく、「文学部処分問題についてはあらたな処分制度をつくることによって追加処分問題も含めて再検討したいこと」などが非公式に打診されたとある。注256の鈴木貞美文には上述の通り「白紙還元」の文字がある。注257は上引の『戦後50年その時日本』3。なお「政治的には信じ難い愚行」は、佐藤誠三郎「学生反乱の背景と可能性」(6906『中央公論』)の言葉。

小熊著は、ほかの誰にも書けない大著であり、敬服する。この記述にしても、改行が足りないだけで、注255は、そのあとには及んでいないのかもしれない。それなら「「白紙還元」する提案」の出所を注記すればよかった。それは次の段落の注256で注記したつもりだろうか。一番肝腎のところで資料の出所を間違えたように見える。内藤国夫は、毎日新聞で松尾康二とともに東大紛争を報じつづけた記者であり、12月23日の申入れのさいに「白紙還元」が記されたり語られたりしていたら、『ドキュメント東大紛争』に書いたらどうだろう。

「白紙還元」は、当時、行きかっていた言葉らしい。<sup>(7)</sup>そういえば、私も当時の資料中でその文字を見たことがある。68年7月8日の法学部教授会議事録には、学生による安田講堂再占拠を受けて医学部処分の「白紙還元」が議論され、「白紙還元の措置は、さらに学生から白紙撤回の線まで要求される懸念がある」などの意見の開陳があったという。11日も同様であり、17日（木曜日なら18日か）の法学部教授会では、前日までの学部長会議で「白紙還元」について意見交換があったと辻学部長から報告があり、三ヶ月教授から別紙「再審査の機構、手続に関する問題点」について説明があり、「白紙還元という名称は、種々誤解もある」ので、これを「処分取消し」「処分撤回」「処分一時棚上げ」「処分再審査」等の名称にするなどの意見の交換があったという。ちなみに加藤執行部の回想会議でも、68年10月16日の経済学部教授会の意見として、「粒良処分の白紙撤回を再確認するということ」、「残りの十一人の処分を白紙還元する、これはすぐ撤回といいませんで、還元といっているわけで、もう一ぺん審査をやり直すという形にしたかどうかということ」をまとめた大内自身が回顧している。

医学部処分に関する「白紙還元」は、「白紙撤回」との対比で、よく語られた言葉のようだ。その目で見直すと、『東京大学弘報委員会「資料」1968.10⇒1969.3』（6908）には、医学部処分について「還元」や「白紙還元」が何度か記されていた。68年6月28日に豊川医学部長が粒良処分を「処置前の状態に還元する」と声明し、9月16日と10月8日の医学部集会で粒良処分の「白紙還元」の解釈について激しい討論があったし、11月2日に小林医学部長が、粒良処分は6月28日に「処置



前の状態に還元した」が、今や「白紙に撤回された」、粒良以外の11人の学生の処分についても「処分前の状態に還元」されていたが、「処分を撤回する」と述べている(405, 16, 26, 33f頁)。

「白紙還元」という言葉は、日本の歴史のうえで、重大な危機の回避策として語られたことがある。1941年の日米交渉が行き詰って近衛文磨首相が総辞職した翌日の10月17日、重臣会議で「九月六日の御前会議の再検討」(対米戦争を辞さない決意で外交交渉に期限を付した帝国国策遂行要領の再検討)を主張した木戸幸一は、「大命降下」した東条英機に「九月六日の御前会議の決定にとらはるゝ処なく、内外の情勢を更に広く深く検討し、慎重なる考究を加ふることを要すとの思召」を伝達したが、岡義武はこれを天皇が「白紙還元、再検討」を命じたものと解説している(『木戸幸一日記』6604, 07)。これが「白紙還元の御錠」と呼ばれるのは、昭和天皇自身の言葉ではなく、歴史家の事後解釈によるのだろう。

60年安保の危機でも、この言葉が語られた。たとえば丸山真男は、5月31日の講演「この事態の政治学的問題点」(『朝日ジャーナル』600612)で、「議会政治が現実に機能しているということを、政府が自らの行為によって証明し得るただ一つの方途は、国会を直ちに解散し、二十日の強行採決を白紙に還元する以外にないと思います」と結んだし、6月23日か翌日の座談会「現在の政治状況」(『世界』6008)では「新しい第三の段階を迎えて、たとえば解散によって安保採決が当然に白紙還元されるような時期が過ぎてしまった」と発言している。

「白紙還元」は、東大法学部教授がよく用いる言葉のようだが、何かで行き詰ったとき、何かをなかったことにはできないが、それに近くやり直すことに解釈改変する言葉ではないだろうか。白紙に戻して再検討するが、どのように再検討するかは明示しない玉虫色の言葉であり、歴史の事後解釈において、いいくめ、ごまかし、つくろ言葉であることも多い。加藤代行は、68年7月7日に米国一年弱滞在から帰った直後、法学部教授会で聞いた言葉を記憶していただろうし、12月23日に最後の申入れを共闘会議にしたとき、その言葉を思い浮かべたかもしれない。しかし文学部処分に関しては、その言葉を使ったことはなかった。いや、12月23日の時点では、その言葉を使えなかっただろう。

加藤代行の最後の申入れのメモは、かなり踏み込んだものだった。加藤代行は、12月2日の「提案」では林文学部長らの掣肘を受けて、この事件を「今後の処分制度検討のための参考として考えていく」としか言えなかったのと比べれば、12月23日のメモでは、仲野処分について「処分制度の変更の上に立って再検討する用意がある」と言ったのだから、かなり進めたことになる。しかし再検討する結果がどうなるかは示さなかったし、林らが再検討しても仲野の復権にすら反対することは十分に予想できた。実際に12月26日の「基本的見解」の翌日、福武が文学部教授らに仲野の復権を力説したら、問題にもされなかった。堀米文学部長が処分の消去によって仲野の復権を告げたのは69年9月5日から26日、加藤の最後の申入れから約9か月、文学部学生の長い闘争によって泥沼を経験した後だった。しかも堀米は、仲野処分は「適法」だったと言い張ったし、処分対象の行為の事実を問い直そうとしなかった。共闘会議が七項目の第四で要求した文学部「不当処分」の「白紙撤回」からは遠かったが、それを「白紙還元」と呼ぶことはできたかもしれない。しかし12月23日の申入れには、仲野復権の裏づけすらなかった。それを「白紙還元」と呼んだら、共闘を釣り上げるための玉虫色の甘言としか聞こえなかっただろう。それでも加藤執行部は、新制度の

もとで「再検討する用意がある」と踏み込んだのだから、共闘会議は話し合いに応じてよかったのだろうか。

そもそも共闘会議の運動は、自分たちの要求が実現されれば闘争をやめるような運動ではなかった。1968年12月24日に加藤代行の最後の申入れを拒否してから4日、28日から29日未明にかけてか、山本義隆や最首悟らは、助手や大学院生を中心にした座談会「'68年～'69年越冬宣言」を開いた（山本義隆『知性の叛乱』末尾）。東大闘争は個別改良運動か革命運動かという党派の問題設定とは違って、「大学闘争から社会的な運動、そこから全社会的な変革を展望していく運動をつくっていく」、七項目要求も最初は改良的課題だったとしても、「全共闘に結集した部分はその改良的課題を革命的に位置づけていった。だから、改良的課題の七項目がぜんぶかち取られても納得しない。そこまでいっている」と山本は語った。最首「すでにこれは百姓一揆型になっていて、弾圧されるべき存在として共闘会議運動は進んでいる」、加納明弘「もう引くことができない」、山本「徹底的な弾圧しかあるまい」と指導者たちは語った。かつて丸山真男が「運動」というよりはむしろ徳川時代の一揆・打毀しなどの「騒擾」の直系」として日本の社会・労働運動の伝統があり、「軍隊・警察の組織的暴力によって鎮圧されることでケリがつく」と論じた（『忠誠と反逆』6002『近代日本思想史講座』6）が、その轍を踏みはしなかっただろうか。「玉砕主義や革命的敗北主義はだれもとろうとしてはいない」と最首は言った（『玉砕する狂人といわれよう』690119『朝日ジャーナル』、発売は1月10日）。ところが主張すべきことを最低限書いたその文章で、全共闘の七項目要求と八・一〇告示撤回要求に大学側が答えないとして、後者には立入りながら、前者の焦点の文学部処分問題には触れなかった。

山本義隆らは、自分と社会の矛盾を止揚する運動、学生管理と対決する運動をめざしていた。「ぼくら自身の中にある矛盾を、どう止揚するか、まさに科学者としての存在を否定していく形において、僕らの運動は存在し得る」。「東大解体」など、七項目にかわる合言葉を探していたが、七項目については、ただ要求貫徹を求めているのではなかった。「たとえばなしくずしに大学当局が文学部処分を撤回していったらどうなるか」、「のみかたが気に入らん」という問題をすでに離れていて、「われわれが七項目要求を貫徹したら、いままでの学生管理システムは空洞化する。あとを埋める新たな方式が要求される。収拾を通じて当局はかならず出してくる。のみっぱなしということはある得ない。現実に加藤提案という形で出てきている」。有志連合の学生が七項目を人権の問題としてとらえるのとは違うから、「ぼくらの分裂は必至であるし、ぼくらは相対的により少数派に転化していく。困難な時期が出てくる。ぼくらはそういった新たな管理方式に対決する運動をつくらねばならない。そういう意味において運動は半ば永続的に進化していく。」そのような永久革命の運動を続けるとしても、予想される弾圧を避ける選択はなかっただろうか。

山本義隆は、2016年3月5日の歴博での聞き取りで、1968年12月24日夜の代表者会議について語った。加藤執行部の最後の申入れに対して、拒否するかどうかは「今でもどっちがよかったのかな、どっちが正しかったのかな」という思いはありますが、あの時の議論では率直に言って「話にならないか」というのが大勢だったですね。そんなに深刻に議論した上でというのでは無かった。」ただ、交渉だけはやって、その上で拒否するのがいいという議論もあったというから、加藤一郎と山本義隆の討論を見たかった。その日の代表者会議は何人くらい集ったのかは、「数人じゃない、

かなりの<sup>おおぜい</sup>大勢です」とのことだったが、その日も100人から200人くらいの大衆討論だったのかは確認できなかった。ともかく23日の加藤代行の申入れとメモでは「話にならん」というのが意見の<sup>たいせい</sup>大勢だったらしい。「新しい提案の内容も思想的には従来と変わらない」「自分たちはやはり処分自体を問題にしているので、改革を求めているわけではない」と加藤が聞いた24日夜の最首の言葉（前掲回想会議記録）のように、また、「大学側の考え方は基本的には変わっておらず」、欺瞞的だと山本が語った25日夜の記者会見（前掲毎日新聞681226）のように、処分制度の改革や仲野処分の新制度での再検討という「新しい考え方」では「話にならん」かったのだろう。「話にならん」ということのなかには、七項目要求を満たしていないことだけでなく、学生管理の思想が変っていないことがあっただろう。

共闘会議が七項目要求の「文学部不当処分白紙撤回」にこだわったのも、ただ「教育的処分」として教官の特権や慈恵を問題にしたのではなく、「政治的処分」の意図も含めて学生への管理や支配を問題としていた。教官と学生が揉みあったのに、なぜ学生だけが処分されるのか、二人の行為の事実がまともに議論されないのはなぜか、処分された学生が復権すればそれでいいのかといった問いがつきまとった。それゆえ七項目要求についても、ただ要求貫徹を目標としたのではなく、のみ方を問題としたのでもなく、学生管理や社会矛盾と対決する永続的運動のなかに位置づけていた。一人一人が自分の責任で参加していたから、指導者が参加者に責任を負うような組織ではなかったし、政治学者が無責任と言うような政治運動でもなかった。それでも、要求が実現されても闘争をやめないのだったら、要求が実現されなくても闘争を一旦たたむこともできたのではないか。それでは、加藤代行の最後の申入れを共闘会議は拒否するべきではなかったのか。話し合いに応じても確なことはなかったかもしれないが、それはこれまでの考察とは別の問題だろう。

最後に、東大紛争の大詰めで焦点となった文学部処分問題について、三文学部長の行為を要約することによって、これまでの考察をまとめたい。山本達郎文学部長は、1967年12月19日の評議会の議において仲野の行為を複数教官に対する「学生にあるまじき暴言」として誇大に説明して処分を決定し、一か月後に事実を修正したが、そのことがずっと明らかにされなかった。林健太郎文学部長は、1968年11月上旬の軟禁時以外は、仲野と築島の行為の事実を議論せず、教師への「非礼な行為」という10月28日の説明を維持し、加藤執行部の紛争解決策を掣肘しつづけた。堀米庸三文学部長は、東大紛争が文学部のみ終らなかった1969年9月5日、仲野処分を消去するとして、仲野は復権するが処分は適法だった、ただ教育的処分観を変革するとしたが、扉外での築島先手という事実を指摘されても、仲野本人に事実を確認しなかった。事実問題を議論すれば、処分の権利問題に波及するのを恐れたのだろうか。不思議なことに三文学部長とも、まず事実を重んじるはずの歴史学者だった。<sup>(8)</sup>

## 註

(1)——近年の労作として高口英茂『東大全共闘と社会主義』全5巻(1611)があるが、重要な著作として小熊英二『1968』(0907)がある。ただ、この大著は、加藤代行の最後の申入れについて文学部処分の白紙還元説を

とっている。

歴博の共同研究「『1968年』社会運動の資料と展示に関する総合的研究」の最初の会合が2015年5月17日にあった日、終了後の「風流」での懇親会で、小熊英



二『1968』を越えられるかと代表の荒川章二が共同研究の課題を語った。私は、少なくとも東大紛争の山場の文学部処分問題については、小熊著の白紙還元説は間違っていると述べた。初対面の道場親信が話を引取って、紛争は解決するのではなく収拾するしかないから、自分たちの要求を貫徹するだけではないかとして、彼自身が1990 年ころ早稲田大学の学生として経験した団交の後味の悪さについて語った。たしかにそれは、紛争において非妥協的に闘争することの当否を考えさせる価値問題であり、亡き道場がこの共同研究を導いた記憶とともに忘れられない。ただ、私が先に述べたのは、歴史研究において資料の出所を間違えて記してはいけないということであり、小熊著の事実問題だった。そのとき念頭にあったのは私の「銀杏並木の向こうのジャングル」(1407『現代思想』)の注の次の指摘だったが、ここではそれを検証しようとする。

小熊英二『1968』(〇九年)は、六八年一月二三日、七項目要求のうち六項目が受諾され、文学部処分も「白紙還元」が提案されたのに、全共闘は拒否したとして、佐藤誠三郎のいう「政治的には信じ難い愚行」の理由を縷々考察している(上、八九五頁以下)が、「白紙還元」が提案された事実はない。「白紙還元」の提案は、同書注記の内藤国

夫『ドキュメント東大紛争』(六九年)にはなく、鈴木貞美「四半世紀ののちに…」(『海燕』九三年八月)にのみ見られる。提案の正確な内容は、七一年四月の法廷で加藤自身によって証言されている(折原浩『東京大学——近代知性の病像』七三年、二八五頁)。

(2)——資料については題名と西暦の刊行年月(日)二桁ずつを略記する。発行者などは、それなしに資料が特定できない限りで記す。引用文中の……は原文のまま、…は引用者による中略、／は改行。

(3)——毎日新聞夕刊によれば、11 日午後2 時からの学生大会は、民青系の緑会委員会と反民青系の法学部闘争委員会がともに無期限ストを提案しながら四項目要求と七項目要求とで対立、「坂本竜馬ばりに、両派の調停役を買って出る者」が次々現れ、翌朝6 時半の10 回めの採決で、民青が反対しない修正案が可決された。

(4)——たとえばビラ「授業再開を云う前に」(690127 ころ、写真7)は、入試中止によって「大学の自治を侵した政府に抗議し、早急に授業を再開して学園を正常化する」と加藤代行や全学連行動委が唱えるのに対して、「大学の自治を守る」とはどうすることなのか、「大学とは、学問とは、研究とは一体何なのか、その基盤は何なのか」「大学は、社会(体制)の中で基本的にどうい

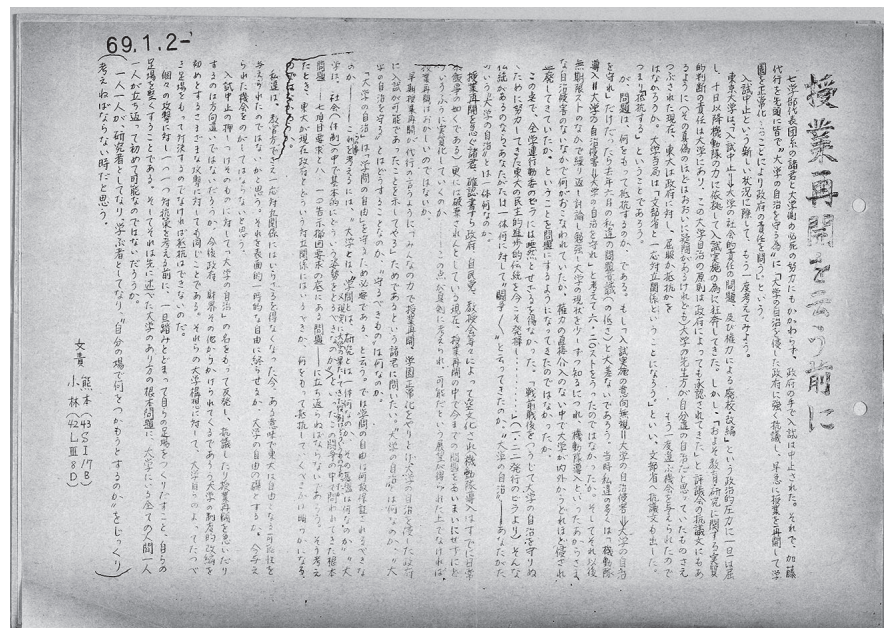


写真7 ビラ「授業再開を云う前に」

1969 年1 月27 日ころ、国立歴史民俗博物館所蔵(東大闘争資料集)

う姿勢をとるべきなのか”“また現実に大学の果たしてきた役割はどういうものであったか”といったこの闘争の中で問われてきた根本問題——七項目要求と八・一〇告示撤回要求の底にある問題——に立ち返らねばならない」と論じている。68年入学の筆者の一人熊本は、のち環境問題や原発問題で活躍する熊本一規だとわかった。それまでクラス連合に参加していたが、「1/18, 19後に民青になびいていく一方のクラ連に異和感を感じていた三人組で作った」ビラだと、2018年1月5日に熊本から返信があった。

(5)——文学部処分にも事実誤認があるという折原浩の主張、とくに築島先手の仮説を検証することを求めた主張は、どれだけ顧慮されただろうか。69年4月前後の4補佐の会議ののち、70年6月7日ころ加藤執行部の回想会議が開かれたとしたら、69年10月の折原の主張への言及があってもおかしくないし、なければ回想会議の時期について疑問がふくらむ。ちなみに回想会議の記録には、折原への言及が二度ある。68年8月に折原論文（『東京大学の死と再生を求めて』680821パンフレット、のち『中央公論』6904）が現れて、非常にシリアスな段階になったこと。また、69年3月の折原論文（「なぜいま授業再開を拒否するか」690318、のち『中央公論』6905）で、1月18日の機動隊導入の意図は「国家権力から入試復活の条件として課された封鎖解除のため」だったとして、朝日新聞690115、毎日新聞690116fを引用しているが、執行部としては入試復活のために機動隊を導入したのではないのに、そのように読めること。しかし69年10月の折原の主張を検討した形跡がないのは、69年1月の機動隊導入までが裁判の争点だったからだろうか、文学部処分については行為の事実を問うつもりがなかったからだろうか、ただ蒸し返したくなかったからだろうか。

(6)——2014年6月22日に長谷川宏から聞いたところでは、この二文書は69年12月のストライキ解除から一年有余を経て、人文系の大学院生の集会で示した総括文書であり、一時は人文系院生約300人のうち約150人は全共闘派だったが、一年有余を経ても大学院生だけで30人くらい集まったという。

(7)——2014年7月29日の鈴木貞美からの返信による。そもそも文学部処分を「白紙還元」にすると加藤執行部が回答し、東大全共闘の中核が「闘争全面勝利」とする幕引きを検討したという鈴木説は、12月23日の最後の申入れのことではなく、それより前のことらしい。加藤

執行部から文スト実の革マル執行部に打診があったという。文スト実がそれをのめば東大闘争は幕引きになるので、加藤執行部に確認したところ、文学部執行部の意見は加藤執行部の方針と違いがあり、文学部執行部は処分を正当としている以上、「白紙還元」されても再び処分されるのは目に見えていたので、その打診をのまなかったという。また、それをのめば「全国全共闘」から排除されるだろうから、革マル派にとつての損得という党派の利害からも、東大闘争の幕は降せなかったという。

(8)——文学部処分問題において事実が重んじられなかったのと同じようなことは、事実の解明を求める者がしばしば経験することであり、私も小さな経験をしたことをここに記す。2005年7月8日、九州大学大学院比較社会文化学府の教授会に学生某の博士論文提出資格の申請があり、指導教員のHから説明があった。私は、この学生をよく知っており、個人的な怨みは全くないが、博士論文審査の前提となる単位取得について疑問があると前置きして、急いでメモした次のことを発言した。「これは数年前共通室でHから聞いた話だが、私だけでなくもう一人も聞いていた。某君は文学部で博物館学的な授業を担当していたN先生の授業を受けており、必修科目なのに不合格になりそうだった。某君の指導教員のHは、何とか合格にしてもらおうとN先生に働きかけたが、N先生は大変頑固で強く抵抗したという。そこでN先生の弱点は何かと考えたところ、N先生が学生だったときの指導教官がAだったことがわかったので、同僚のAに頼んでN先生に働きかけてもらい、某君を合格にもらったという。私的な会話を記憶だけで公表してよいかはともかく、これは某君の指導教員のH本人からの伝聞であり、確証はしにくい事実だろう。大学では上の権威によって言うことを聞かせることがないとはいえないが、これはアカデミック・ハラスメントの典型であり、N先生にとっては非常に屈辱的なことだ。博士論文の内容以前に、単位取得の点で論文提出資格がないかもしれないので、提出資格の有無の投票をする前に調査する必要がある。」司会の学府長N「今の発言は却下します。伝聞だから」、私「伝聞でも本人からの伝聞だから、事実かどうか確認すればいいでしょう」、N「却下します」。申請は却下したら消えるだろうが、発言は却下しても消えない。事実を調べれば明らかになることをなぜ調べないのだろうか。不思議なことに、HとAとNの三人とも、東大紛争の時期に東大文学部に在学していた人たちだった。

---

## 文献一覧

---

68.69 を記録する会「東大闘争資料集」全 22 巻, 1992 年 8, 9 月, 国立歴史民俗博物館所蔵

そのなかに「授業再開を云う前に」690127 ころ, 「人文系斗争委員会糾弾資料」690205, 「人文系斗争委員会討論資料」690219 が含まれる。歴博で作成された目録も有益。

評議会記録(乙)1967 年 9 月-1968 年 3 月, 東京大学文書館所蔵

「東大紛争回顧録」ⅠⅡⅢ(補佐の記録)1969 年 3/2, 4/12, 19, 26, 6/7, 東京大学文書館所蔵(福武直関係資料)

加藤執行部の回想会議記録, 1970 年 6 月 7 日ころ, 東京大学文書館所蔵(福武直関係資料, 加藤一郎関係資料)

東大裁判記録(二)1971 年 4 月 30 日, 東京大学文書館所蔵(加藤一郎関係資料)

東京大学法学部教授会議事録 1968 年 7 月-11 月, 東京大学情報公開室開示

加藤代行の共闘会議への「申入書」1968 年 12 月 23 日, 東京大学法学部附属近代日本法政史料センター原資料部所蔵(加藤一郎関係文書)

東大問題資料 1『「七学部代表団との確認書」の解説』1969 年 3 月

東大問題資料 2『東京大学弘報委員会「資料」1968.10⇒1969.3』1969 年 8 月

東京大学広報委員会『学内広報』1969 年 9 月 29 日

山本義隆『知性の叛乱——東大解体まで』1969 年 6 月, 前衛社

折原浩「東大文学部問題の真相」1969 年 10 月 26 日号『朝日ジャーナル』

林健太郎「東大紛争雑感」1971 年 11 月『心』(『歴史と体験』1972 年 3 月収録)

折原浩『東京大学——近代知性の病像』1973 年 11 月, 三一書房

東大闘争統一被告団(自立社)資料編集委員会『資料・東大裁判闘争』1978 年 7 月

長谷川宏「抵抗の持続」1983 年 10 月『批評精神』

折原浩「相互理解不能状況」1988 年 6 月『意味と情報』(『ヴェーバーとともに 40 年』1996 年 6 月収録)

加藤一郎・大崎仁ほか『「大学紛争」を語る』1991 年 8 月, 有信堂高文社

鈴木貞美「四半世紀ののちに…」1993 年 8 月『海燕』

平沢豊『OTHER VOICES 東大全共闘・68-70』2004 年 12 月, 春風社

小熊英二『1968』上下, 2009 年 7 月, 新曜社

加納明弘・加納建太『お前の 1960 年代を, 死ぬ前にしゃべっとけ』2010 年 8 月, ポット出版

## 追記

文学部処分を受けた仲野雅は, 2015 年 10 月に死去した。そのことを知らなかった私は, 2018 年 5 月にこの論文の原稿を送り, 1967 年 12 月の評議会記事要旨の写真の掲載を願ったところ, 兄の仲野孚氏から一月後に知らせが届いた。

仲野雅については, 東大紛争後の消息を知る者がなく, ただ綾部出身の人から同郷と聞いたことを手がかりに, 2013 年の 12 月 1 日, 綾部市故屋岡町の山里を訪ね, 実に運よく会うことができた。仲野は, 1971 年東大卒業後, 東京都庁に 10 年間勤めたのち, 革マル派を抜けるとともに, 郷里に隠棲したが, 公安警察が来た以外は, 誰も訪ねてこなかったという。突然の訪問にもかかわらず, 2 時間近く話してくれた。

仲野は, 築島との揉みあいについては, 逆上して怒鳴りつけたので, こっちも悪かったと言った。どちらが先手だったかと考えたことはなかったという。処分は取消してくれたからいい, 履歴書に書かなくてよかったと言っていた。学生運動よりも, その後 10 年間の内ゲバの方がつらかったとも言っていた。

翌 2014 年夏, 私は「銀杏並木の向こうのジャングル」を送り, 1969 年 2 月 24 日の丸山眞男追及



---

集会でハンドマイクを持った文学部学生Nについて尋ねた。仲野から10月15日付の返書があり、やはり全く記憶にないということだった。「安田講堂陥落後についてはほとんど記憶にないのですが、断片的な記憶が二、三ある中で一つ鮮明に残っている記憶があります。それは二、三十人が私の前にいて、私が「それは文団交のとき既に説明した」といったのに対して、即座に「あのとき君のしゃべり方が早口でよく理解できなかったよ」というヤジを前にいる学友から受けたのです。私はそのとき自分の説明能力の不足を指摘されたものと受け止め、あとあと思い起こしていたので、それだけが記憶に残っています。その前後の経過また周囲の状況について全く記憶にありません。」これは、1969年9月6日の国文科追及集会の記憶ではないかと今回清水は思い至った。

2014年10月15日の仲野の返事は続いた。「何か思い出すことや東大闘争について私が語れることがあるのでないかと時間をおいていたのですが、もう個人的には過去のことでも思い出せません。しかし一方で社会的事件としては過去にはなりきれていないと思います。未だに悔しい思いをかみしめている人とか様々な人が存命ではないでしょうか。当事者がご気楽にぺらぺらしゃべるべきでしょうか。全共闘会議から帰ってきた学友会代表者から、あんたの処分を全共闘の要求に組み込んだからな、と告げられたとき、へえーと思い、これからは半ば、まな板の上の鯉になるしかないなと思いましたが、今も事情はかわらないとおもいます。」文学部学友会の学生運動によって七項目要求に組み込まれた仲野は、まな板の上の運命を受けとめ、さまざまな人々の悔しい思いを噛みしめて生きぬいた。ただ、まな板の上の鯉ではなく、人として口を開いていれば違っていたのではないだろうか。

(九州大学大学院比較社会文化研究院, 国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2018年5月20日受付, 2018年10月1日審査終了)

---

## **The Problem of Disciplinary Punishment at the Department of Literature in the Final Stages of the University of Tokyo Struggle and the Assumed Proposal of Blank Slate**

SHIMIZU Yasuhisa

On December 23, 1968, at the final stages of the University of Tokyo Struggle, Acting President Ichiro Kato requested the All-Campus Joint Struggle Student League (Zenkyoto) to come to the table for a final discussion. It is assumed that he proposed a “blank slate” on the issue of student suspension from the Department of Literature, but the League rejected this discussion. This assumption is not true. The author investigate the reasons why a student was suspended from the Department of Literature, why the League continued to demand a “complete revocation” of that suspension, whether or not the riot police’s battle against students at Yasuda Auditorium on January 18 and 19, 1969 could have been avoided, and why the struggle was prolonged up to December 1969 only at the Department of Literature.

The problem of disciplinary punishment at the Department of Literature during the University of Tokyo Struggle finds its roots in the indefinite suspension of Tadashi Nakano, a Department of Literature student who got into a scuffle with Associate Professor Hiroshi Tsukishima and grabbed the professor by his necktie and hurled violent words at him after the concluding meeting of the conference of students and professors at the Department of Literature on October 4, 1967. In the University Council, then Dean Tatsuro Yamamoto of the Department of Literature, exaggeratedly described Nakano’s behavior as the usage of “violent language unworthy of a student” that was directed against some teachers, and decided to punish him. This statement was revised a month later but the modification has not been disclosed. Dean Kentaro Hayashi, who assumed office at the Department of Literature in November 1968, did not discuss the detailed facts of Nakano and Tsukishima’s action, except for being placed under classroom arrest earlier in the same month, and maintained the official assertion of “impolite behaviour” by the student against the teacher. Professor Yozo Horigome, who took on the role of the Dean of the Department of Literature in August 1969, erased Nakano’s suspension, but continued to claim that the suspension had been lawful and disregarded the fact that Tsukishima was the first to act violently.

The disciplinary punishment at the Department of Literature was the second of two contentious issues of the University of Tokyo struggle. The first was the disciplinary punishment at the Department of Medicine that turned to be an erroneous punishment of an absentee student. After this

---

punishment was completely revoked in November 1968, the second became a primary issue. On December 23, 1968, Acting President Kato proposed to the Joint Struggle Student League that he was ready to reconsider the suspension at the Department of Literature when the institution of disciplinary punishment would be modified. However, there was no prospect of approval of this proposal by the Department of Literature Dean Hayashi and other professors and the proposal was rejected by the Student League. It was not, ultimately, an offer that could be termed a “blank slate.”

Key words: the University of Tokyo Struggle, suspension of a student from the Department of Literature, complete revocation, blank slate, facts of the action